

表紙イラスト
増田 帆南
平沢 咲恵
小川 華歩
小林 由果

第27号



実践女子大学

生活文化フォーラム

生活文化学科、学びの多様性

主任挨拶

I 学びの多様性

生活心理専攻 幼児保育専攻

II 生活文化学科の思い出

退任教員あいさつ

III 生活文化学科の取り組み

オープンキャンパス報告 高大連携の取り組み

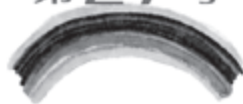
IV 学生の取り組み

学生ゼミ紹介 下田歌子賞受賞者 卒業論文(4年)題目一覧 就活体験記



第27号

実践女子大学



生活文化フォーラム

生活文化学科、学びの多様性

主任挨拶

I 学びの多様性

生活心理専攻 幼児保育専攻

II 生活文化学科の思い出

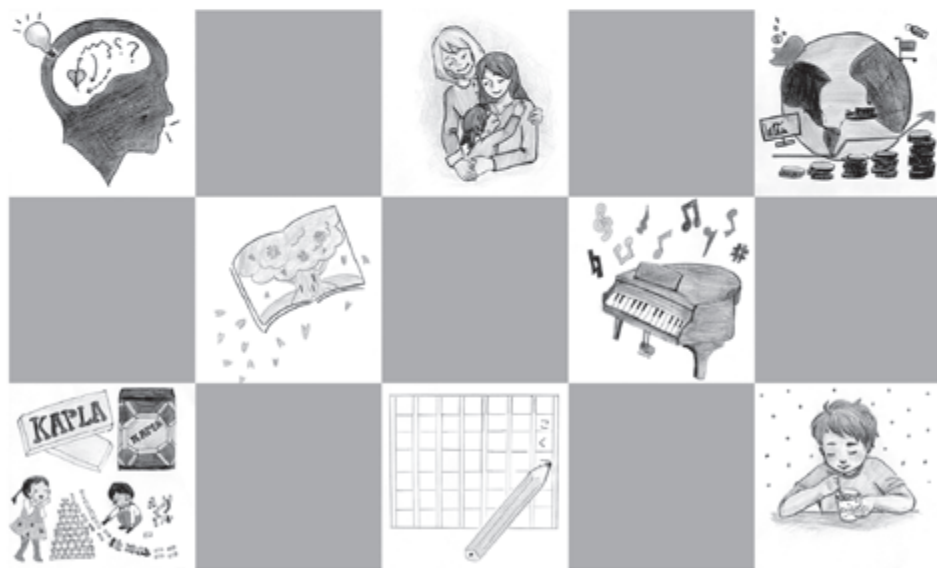
退任教員あいさつ

III 生活文化学科の取り組み

オープンキャンパス報告 高大連携の取り組み

IV 学生の取り組み

学生ゼミ紹介 下田歌子賞受賞者 卒業論文(4年)題目一覧 就活体験記



主任挨拶



本学生活文化学科主任 塩川 宏郷

二〇二二年の夏は異常に暑く、また二〇一九年から続く新型コロナウイルス感染症の流行の大きな波に翻弄されながら過ぎていきました。

衣食住をその研究テーマとする「生活科学」の中に、生活文化学科として「子育て」「教育」と「心」を中心とする教育が整備されて九年が経過しようとしています。

二〇二二年度は、新型コロナウイルス感染症への対応に振り回された二〇二二年度に比べ、感染症の大きな波にもなんとか対応しつつ経過した一年間でありました。授業や教育内容そのものを捉え直す一大パラダイムシフトを経験し、なんとか適応しようと努力する年だったと言っても過言ではないと思います。生活文化学科は幼児保育・生活心理という二つの専攻を有しています。

幼児保育専攻には保育士・幼稚園教諭免許取得をめざす幼保コースと、幼稚園教諭・小学校教諭免許取得のための幼小コー

スはあります。しかし、思いがけない感染症の流行という事態から、オンラインで音声や動画を視聴することや、テレビ会議システムでパソコン越しに自分の調べたことを発表するという授業を想像していた学生は少ないかもしれません。昼休みや空きコマ時間に友達とダベったり、時には途中で抜け出してキャンパス内外を散策するというような学生生活をイメージしていた人も、よもや大学構内に入れない、通学ができないという学生生活をイメージした人も少ないでしょう。しかし、この文章の冒頭のような状況にいたったこの国では、もはや「あり得ないことはあり得ない」すなわち「なんでもアリ」というのが常態化していると言えるでしょう。望んでいた学びができない、学生生活を送ることができないということがわかりました。学生も多いでしょう。一方で、人前に出ると緊張して話せない、自分の持っているポテンシャルを十分だせない、思うようなパフォーマンスができないと感じている人が、オンラインによるマイペーすな学習で多くのことを習得し知的好奇心をさらに高めることができたという例も枚挙に暇がないほどです。感染症の蔓延という非常事態が、新たな学びの方法を定着するきっかけになったと考えることもできます。

大学は、いかなる状況にあっても学びを止めることはできません。「対感染症シフト」三年目の今年も、まさに逆境のその逆手を取って、オンライン授業のいいところ取りを各学科の創意工夫で行っています。施設での実習はどうしても対面で行う必

すがあります。子どもの減少に伴い縮小しつつある幼児保育・幼児教育の動向に立ち向かうべく、地域連携の充実や一人ひとりの学生の持つ特性に応じたきめ細かい指導をめざしています。また、優秀な小学校教員を輩出し続けることも本専攻の目標の一つです。

一方生活心理専攻では、緩やかな関係にある三つのコースプログラム「心理専門職コース」「家庭科教員コース」「キャリア心理学コース」を用意しています。心理専門職コースは、公認心理師の国家試験受験資格につながる三十科目を整備し二〇一九年度からスタートしました。本コースの第一期の入学者は四年度次となり、今年度は卒業前の最大の山場である「心理実習」を福祉機関・医療機関の協力を得ながら実施しました。また、心理学を学びカウンセリングマインドを有する中学・高校の家庭科教員、さらに仕事や生活の場で発生する課題を心理学的な視点から分析できる職業人を養成することを主眼としています。これらのコースプログラムは入り口も途中の道筋も出口も「緩やかな」関係にあり、学生たちはコース間を移行しながら自らの適性に向き合う作業を続けています。

「学び」のあり方は多様であってよいと思います。大学に入学する前は、大教室でマイクを通じて流れる老教授の訥々とした講義を聴くというようなイメージを持っていた学生もいるでしょう。一方で、ごく少数の学生にマンツーマンに近い形で手取り足取り演習をするというタイプの授業に期待していた学生もい

要があります。フィールドワークや施設の訪問見学などは施設との連携のもとでオンラインを取り入れる工夫もしています。この点では、実習の施設のみならず大学の外の世界との連携、地域との連携の重要性を再認識する機会にもなりました。オンラインと対面とをうまく配分するやり方はまだ試行錯誤の段階ですが、新しい学びのあり方として今後も検討を続けていく必要があるでしょう。もちろん、キャンパスライフを通じてリアルな人間関係を体験することも重要な大学教育の要素です。場を共有すること、体験を共有することがコミュニケーションの最も基本的な土台です。この土台の上に意味や意図を共有することがコミュニケーションの発達につながります。

さらに今年度は、高大連携の取り組みとして、高校生を対象とした連続講座(幼児保育専攻)や、高校科目「探究」のサポート(生活心理専攻)を行いました。

生活文化学科は、どのような時代、どのような状況にあっても、学生の多様な学びを下支えします。資格取得だけではなく、学生の知的好奇心に応え、さらに社会人としての姿勢を自ら醸成するよう支援します。対面授業、オンライン授業、アクティブラーニング、演習・実習を柔軟に行い、「生活」「子ども」「心」さらに「環境」「関係性」という視点を持つことを重視します。

今年度の生活文化フォーラムは、学科の方針でもあるこの「学びの多様性」をテーマとしてお届けいたします。

特集1 学びの多様性

〔生活心理専攻〕

- 知覚と認知の心理学を学ぶ 6
作田 由衣子 本学生活文化学科 准教授
- 金融ケイパビリティをどう測定するか 8
高橋 桂子 本学生活文化学科 教授
- 多様性社会の中の生涯発達心理学..... 10
塚原 拓馬 本学生活文化学科 准教授
- 学会報告 ―9月9日国連報告をめぐっての
会員間の議論と学生とのディスカッション― 12
長崎 勤 本学生活文化学科 教授
- 「生活心理フィールドワーク1」(2021年度後期) 14
水野 いずみ 本学生活文化学科 准教授
- 「発達行動小児科学」研究室の紹介 16
塩川 宏郷 本学生活文化学科 教授

〔幼児保育専攻〕

- 誰の何のための「義務」なのか 18
田中 正浩 本学生活文化学科 教授
- 木製遊具「KAPLA®」の教育的価値とは？ 20
井口 眞美 本学生活文化学科 准教授
- 地域の子育て支援を学ぶ..... 22
大澤 朋子 本学生活文化学科 専任講師
- 身体と心のリフレッシュを目的に！
～地域高齢者への運動指導を通じて～ 24
島崎 あかね 本学生活文化学科 教授
- 保育、教育環境について考える..... 26
渡辺 敏 本学生活文化学科 准教授

■ 知覚と認知の心理学を学ぶ

本学生活文化学科 准教授 作田 由衣子

一般的には、心理学といえば人の気持ちを理解するとか、悩みを解決するとか、そうしたイメージを持つ方も多いと思われると思います。実際、心理学をやっていると「心が読めますか?」と言われることもありましたが、残念ながら私自身は人の気持ちを読めるどころか、自分自身のこといまだによくわかりません。オープンキャンパスなどで高校生とお話する際に、心理学を学べば周りの人たちがとうまくやっていると聞けるかもしれないとか、自分の心の悩みを解決できるかもしれないといった期待を持つ方たちをがっかりさせてしまうのは心苦しく思いつつも、心理学というのは非常に幅広い学問であり、必ずしも臨床系とか対人関係に関わるものだけではないし、少なくとも心が読めるようにはならないとお話します。(なお、心理学をしっかりと勉強しようとすると数学や英語も勉強しなくてはならないのだということも必ず伝えるようにしています。)

私が心理学に初めて関心を持ったのは、高校生のときでした。多分にもれず、私も当初は「心理学といえばカウンセリング」といった認識を持っていました。大学に入学し、そこで初めて心理学の授業を受けることになるのですが、最も衝撃的だったのは生心理心理学の授業でした。詳細は割愛しますが、人間を刺激と反応の処理を行う機構のようなものとしてとらえるという考え方

球や耳の中の構造について紹介する回があったり、記憶の仕組みについてお話しする回があったり、確率判断や意思決定などのより高次の認知プロセスについて紹介する回があったりと、幅広く知覚や認知のトピックスを扱います。こうした知覚や認知というのは、先に述べた心理学の一般的なイメージの対極に近いところにあるのではないのでしょうか。かつて大学生だった私が衝撃を受けたように、現在の学生たちもきっと、思っていた心理学のイメージと違うという衝撃を感じているのではないかと思います。なお、この授業は公認心理師の受験資格対応科目なので、将来、対人支援を行いたいという学生たちが必ず受講します。眼球の構造を知ったところで直接対人支援の役には立たないと思われるかもしれませんが、人間の感覚・知覚の仕組みに起因することが支援対象となる方の困りごとに関わってくる可能性もあるでしょうし、そもそもこうして幅広く学ぶところが大学の意義の一つであろうと思います。

最後に、ゼミでの研究についてご紹介します。認知心理学研究室(作田ゼミ)では、主に感性を主軸として、学生たちが様々なテーマで認知心理学の研究を行っています。今年度は、たとえばマスク着用によって顔の印象がどう変わるかとか、香りの持つ心理的影響とか、方向音痴と性格の関係とか、本当に多種多様な研究テーマが集まりました。これも「学びの多様性」ということになると思いますが、自分では考えつかなかったようなアイデアを学生から聞かされると、こちらも蒙の啓かれる思いです。

は、自分の視野をこじ開けてくれるものでした。

私が心理学の領域で最初に興味を持ったテーマは「記憶」でした。研究者にとってはよくある話ですが、自分に欠けているものを研究テーマとする人は一定数いるようです。私は記憶力が非常に悪く、特に人の顔を覚えるのがとても苦手です。しかし、私の母は非常に記憶力がよく、人の顔も覚えやすく、何年も前に話したことでよく覚えていたりします。この差はいったいどこから来るのでしょうか。覚えやすいもの・覚えにくいものはあるのか、たとえば顔から感じる印象はその顔の覚えやすさに影響するのか。そんなところをきっかけの一つとして、私の研究テーマは「印象が記憶に及ぼす影響」となり、卒業論文から博士論文に至るまで継続することとなります。

卒業論文では、初対面の場面を想定して、顔と名刺の組み合わせの印象が一致するかしないかによって、覚えやすさやどう変わるかを調べました。元々絵を描くのが好きで、デザインにも関心があったため、当時はどちらかという顔よりも名刺デザインをメインに研究したいという気持ちもありました。名刺に限りませんが、デザインと心理学は密接に関わっています。印象については知覚心理学や社会心理学などの分野でそれぞれ研究が行われてきましたが、それらの知見を統合できないかということをずっと考えています。

記憶も印象も、大きくは「認知」という心のメカニズムの括りとしてとらえられます。私が現在担当している授業で「知覚・認知心理学 a・b」という科目があります。この授業では、眼ここ二日程、コロナ禍で対面での実験が制限されることもありましたが、今年度は実験室で実験を行う学生もいたり、思い切ってオンライン実験に舵を切る学生もいたり、そのために PsychoPy によるプログラミングの勉強に力を入れたり、研究の実施の仕方にも様々な変化がありました。この原稿を書いている時点(十月)では、まだ実験を始めていない学生もいるのですが、全員無事にデータを取って卒業論文を完成させてくれることを信じています。

今回の生活文化フォーラムのテーマは「学びの多様性」ということで、自分自身の学生の頃の学びも振り返りつつ、知覚と認知の心理学についてまとめてみました。学生の中には、たとえば〇〇系の仕事をしたいから直接それに関係する勉強だけすればいいやといったように、もしかしたら必要最低限の勉強しかしたくないという方もいるかもしれません。しかし、現代のように急速に変化していく時代を生きていくには、学び(とそれによって得られる知識)の多様性が必要です。重要となるのではないのでしょうか。食わず嫌いをせずに様々なことを幅広く学ぶことで、それがバッファとして機能し、変化への対応を可能にするのではないかと思います。

金融ケイパビリティをどう測定するか

本学生活文化学科教授 高橋 桂子

専門は生活経済学・生活経営学で、本学では専門科目として「家庭経営学」、「生活経済論」、「生活デザイン入門」など、全学共通科目として「数学的思考」や「ライフデザイン」を担当しています。

今回は、昨今、取り組んでいる研究、実践女子大学プロジェクト研究所「ケイパビリティ×Nudge研究所」(設置期間…二〇二二～二〇二四年度、プロジェクトリーダー…高橋)の取り組みについて紹介します。この研究は、OECDが提示する「ケイパビリティ」という概念の浸透そして涵養を目指して「家計・金融」と「健康・環境」の観点からNudgeを介在させた研究に取り組もうというものです。本学科から、松田純子先生と鳥崎あかね先生に参加いただいています。

OECDの能力観は、リテラシーからコンピテンシー、コンピテンシーからケイパビリティ、そしてケイパビリティからエージェンシーへと展開しています。リテラシーは当初、読み書き能力と定義されていましたが、一九八〇年代中頃、単なる読み書き能力から「社会で機能するため、個人の目標を成し遂げるため、そして自分の知識や可能性を発達させるために、印刷され書かれた情報を活用する」(Kirsch & Jungblut, 一九八六、p.4) 情報処理能力へと定義が拡張されます。そして情報処理能力と定義

リテリ論という色彩が強い概念といえます。

ケイパビリティ概念をどう捉えるか、そして我々はこのプロジェクト研究所で「家計・金融」と「健康・環境」面からどう測定していくのか。二年後の設置期間最終年度には、何らかの具体的な形を提示したいと日々精進しております。

さて、本研究室四年生の卒業論文テーマについてお話しします。今年度のテーマは、「大学生のチーム貢献意欲を促進する要因についての検討」(今までの学生生活が日常的リーダーシップ行動に及ぼす影響)、「SNSの炎上への関与・容認に自己意識が与える影響」、「心理的負債感とコンピテンシーの関連・援助要請スタイル、友人関係方略への影響」、「親からの直接的・間接的な金融教育が金融行動へ及ぼす影響」と「自己評価と他者評価のギャップが提案型リーダーシップに与える影響」です。リーダーシップ、モチベーションや金融経済教育が中心です。それぞれが調査票を作成し、Googleフォームによる調査を依頼し、関連、一元配置分散分析、そして重回帰分析など多変量解析を通して仮説を検証します。卒業研究は何といつても、漠然とした問題関心を明確にするまでに多大な時間を要します。しかし何を研究したいのか、自分のリサーチクエスチョンを一言で表現できるようなれば、そこから先はスイスイ、迅速に進みます。そのためには三年時のゼミで先行研究の内容を発表するときに、最後に自分ならこのテーマをどう分析するかというお題を課しておりますが、これがどうやらポイントのようです。この議論

されたリテラシーはその後、DeSeCoプロジェクトにより、技能、態度といった「情意」を含む人間の全体的な能力を捉える概念、コンピテンシーへと発展していきます(松尾二〇一六など)。では、コンピテンシーからケイパビリティへの架橋とは、どのようなものでしょう。両概念の最大の差異は、コンピテンシーが現在の実行可能(Valid)かつ顕在化される能力、つまり何らかの形で測定可能な能力であるのに対して、ケイパビリティが現在や将来における自由や選択の可能性、潜在的な力の向上(山本二〇二一など)と定義されることから明確です。同時に、ケイパビリティは潜在的な力の向上と定義されますので、この概念をどう測定するのか、そもそも測定可能なかと頭を悩ませている所です。

金融経済領域に注目すると、金融ケイパビリティという用語はイギリス、アメリカで使用されています。アメリカでは金融ケイパビリティに関する大統領諮問委員会に関する大統領令(二〇一〇)で、「金融ケイパビリティとは、知識とスキルとアクセスに基づいて金融資源を効果的に管理する能力である。(中略)金融ケイパビリティは、個人に、情報を選択し、落とし穴を避け、どこに助けを求めにいったらよいかを知り、現状を改善し長期的な金融面での暮らしを改善するための行動をとる力を与える」とあります。コンピテンシーという概念は、保持している現有能力に加えて潜在的な力の向上という側面だけではなく、伊藤(二〇二二)らが指摘するように、金融排除されている低所得者層に対する金融包摂の観点からみた金融ケイパビリティを繰り返すことで「漠然とした私の関心」は「明確な私の問題意識」へと昇華します。データ収集を十月で終えると年末までは大忙しの日々です。でも、これもキャンパスライフの醍醐味!しかもゼミ仲間と切磋琢磨した経験は財産になります。キリッと引き締まったいい表情をした学生が卒論研究に真剣に取り組む十二月は、教師を実感できる大好きな季節です。学生には「幼稚園以降、受けてきたあなたの教育の総仕上げだから、悔いがないよう、しっかりと取り組みなさい」と叱咤激励の日々です。

学内では、今年度より下田歌子記念女性総合研究所の所長を拝命しています。来年度は研究所創設十周年を迎えます。より活



気溢れる存在意義・存在価値の明確な研究所を目指して、兼務研究員による毎月の勉強会の開催や、学祖を同じくする新潟青陵大学さんとの連携に取り組んでおります。十一月には新潟青陵大学図書館で一ヶ月、「下田歌子と教育」と題した連携事業特別企画展示を開催いたします。兼務研究員の皆様の豊かな才能をどう組み合わせるか、何を全体のテーマとして研究するかなど、ワクワクしながら取り組んでおります。

■多様性社会の中の生涯発達心理学

本学生活文化学科 准教授 塚原 拓馬

多様性という言葉をよく耳にするようになりました。色々な価値観や意見を持った人々が共に暮らせる社会に向かうことは望ましいことですし、成熟した社会のあるべき姿なのかもしれません。しかし、その多様な社会の中で、各個人がどのように生活し、人生を送るのかについて考えるとき、必ずしも良いことばかりではなさそうです。

「多様性」という言葉を裏返せば、様々な価値観や生活スタイルを持つ人々が共生し、交わる「複雑性」という言葉が見えてくるかもしれません。ここでは青年・成人の人間発達について少し考えてみたいと思います。

かつて昭和時代の日本社会においては、男は社会労働、女は家事労働といった性別に基づく社会生活でしたが、それはもはや過去のものとなり、男女問わず職業生活と私生活の両立が必要な時代となりました。昭和を支えた男性中心社会における年功序列と終身雇用制に基づくキャリアパスモデルでは、長い職業生活を送ることが難しくなり、新しいキャリアパスモデルを探索していくことが不可欠となっています。

また、超高齢化社会と少子化社会の到来により、生産年齢人口は著しく減少していきます。そのため、中小規模の組織を中心に圧倒的な人手不足が社会課題となっています。そのよう

な現状を踏まえて、これからの日本の社会はどのような方法でそのような状況を打開していくかが重大な課題であると思われます。

そこで、考えられているのが、「外国人労働者の雇用、雇用の延長（シニア世代の積極的雇用）、疾病と職業の両立支援」であります。（図1参照）

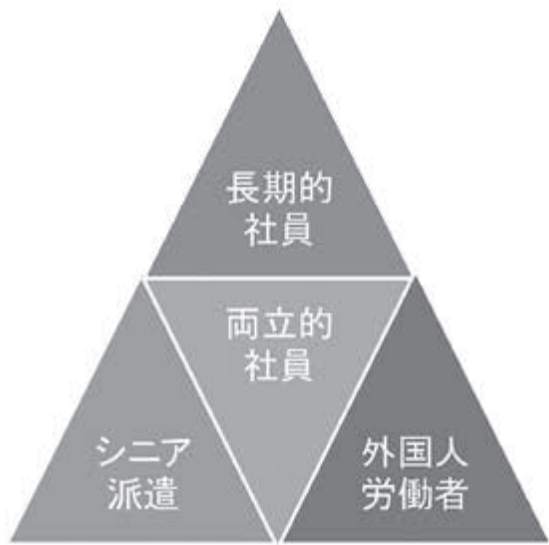


図1: 多様な人材による組織構成

ようなものか」について明らかにしていく学問領域です。

人の発達、変化は社会（時代）の影響を受けます。特に青年期以降、成人をしてから高齢期に至るまで、どのような社会で生きるかにより、その特性は文字通り「多様な」色彩を持ちます。しかし、一方で、時代がどのように変化しても、大きく変わることがない特性もあります。その両者を見分ける力を与えてくれるのが「生涯発達心理学」で研究された知見です。

生涯発達心理学は、これからの時代を生きる学生達と共に考えながら創ることが出来る学問領域であると思っています。

まず、外国人労働者の雇用についてですが、外国人労働者を組織の中で雇用していくにあたり、少しでも長期的に働いて組織に貢献してもらえ人材になるためには、様々な価値観や宗教などの生活背景を持つ外国人に対応した人材育成が不可欠となります。

また、これまでの社会慣習では退職していたシニア世代を積極的に雇用していくことで、人手不足を補うことが求められています。その場合も、新たにリスキリング（再学習）を勧め、より新しい知識や技術を取得するための育成プログラムなどが不可欠となります。

さらに、何らかの疾病を持ちながら治療と職業を両立していくことを雇用者が積極的に支援していくことも重要となります。従業員は皆が心身共に健康であるとは限りません。統計的にはおよそ二人に一人がガンを患う可能性があるという時代があり、メンタルの問題も他人事ではありません。

このように、これまでの日本社会における人材育成のあり方、キャリアパスモデルでは、前述のような多様な人材の職業生活を支えていくことは難しいという課題に直面していると思われる。

そこで、現代社会において人が適応的に生活するということとはどういうことなのか、また個人が上手に年を重ねることについて、改めて考えていくことが求められています。

生涯発達心理学とは、このように多様な社会において、複雑な人間の発達と変化について探究し、「最適な発達とはどの

■ 学会報告 — 九月九日国連報告をめぐっての
会員間の議論と学生とのディスカッション —

本学生生活文化学科 教授 長崎 勤

二〇二二年九月九日に、「国連・障害者権利委員会・第27回セッション・日本の初回報告に関する所見のまとめ」が出され、精神医療、特別支援教育などの分野に大きな波紋を呼んでいます。日本発達心理学会の会員の有志では、来年三月の大阪での大会で、ラウンドテーブルを企画し、その準備のためにディスカッションを重ねていますので、その一部を紹介します。

以下は、報告の特別支援教育に関わる部分の一部抜粋試訳です。

●教育(第24条) 51. 委員会は、次の事項について懸念する。

(a) 医学的評価を通じて、障害児の分離された特殊教育(special education)を継続させ、障害児、特に知的障害または心理・社会的障害のある子供および、より集中的な支援を必要とする子供にとって、通常(regular)の環境での教育を利用できないようにしていること、ならびに通常の学校における特別支援教育クラスの存在(special need education class)。

(b) 障害のある子供を入学させる準備ができていないとみなされ、また実際、準備が不十分であること、また、特別クラスの生徒は学校時間の半分以上を通常のクラスで過ごすべきではないという、二〇二二年に通知された大臣の通知を理由に、

通常の学校への入学が拒否されていること。
(c) 障害のある学生に対する合理的配慮の提供が不十分であること。

(d) 通常教育の教師のインクルーシブ教育に対するスキルが欠如しており、またそれへの否定的な態度。

以下が報告に対するディスカッションのポイントの一部です。

1. 日本では子供が減っているのに、特別支援学級・特別支援学校の在籍児が増え、転籍率の増加という事実をどう捉えるか？

・ 特別支援学級・特別支援学校の在籍児数が、この十年でおよそ二倍に急増している事実。

・ 「転籍率」が(一九九三―二〇一三年度)に〇.二%から一.二%の六倍に増加の事実(赤木, 2019)。

2. ある子供たちは、通常学級で学習や生活がしにくくなっているのだろうか？

・ 四十(三十五)人の学級サイズとの関連。

・ 通常学級の教師の障害児支援のスキルが不足との指摘をどう考えるか？

3. 海外では？

・ イタリア…一学級二十名以内。障害児が入ると担任が二名に。学内リソースルーム等で個別対応も行われている。

・ アメリカ…自閉症児が特別支援学校で情動調整の指導を受け、通常学級の担任も研修し、通常学級に戻るなど

の体制が取られている。(コネティカット州トランプル市・Cooperative Educational Services (CES)・Developmental Learning Center)

4. 典型児からの障害児の分離、障害児からの典型児の分離によって、双方にとって大事な発達機会(多様性・レジリエンスの学習)が失われるのではないか？

では、今の学生はこの報告にどんな感想を持つのでしょうか？
長崎ゼミ内で勉強会を行い、ディスカッションを行い、学生からコメントを頂きましたので紹介します。

●私は高校まで障害者について学ぶ機会が無かった。普通学級ではどの授業などでも試験のための勉強しかしておらず、障害者の特性や関わり方などの知識を身につけることがほとんどない。普通学級と支援学級の分離もあり、障害者を理解する機会を得ることが出来ていない。そのため、障害児が普通学級で勉強や生活をする機会は必要だと思う。(三年Aさん)

●今後、日本でインクルーシブ教育を行っていくには、今の教育体制を見直す必要があると考えます。例えば、一クラスの人数を減らす、従来の授業のやり方を見直す、教職課程では発達障害のような特別なニーズを持つ子供たちについての学習時間を増やすなどの方法が挙げられます。これらの実現のためには、恐らくとても長い年月がかかるでしょう。しかし、今できることから少しずつ変えていくことで、

いずれ大きな変化が生まれ、インクルーシブ教育が実現する未来が作られていくのではないのでしょうか？(三年Bさん)

●今障害について学んでいる私たちでも、幼い頃に障害のある人たちと関わるのが圧倒的に少なく、身近ではありませんでした。教師も障害に対する知識のなさから、通常学級で受け持つ自信がないのだと思います。そのような現実が、分離教育に繋がっていると感じます。特別支援教育が、その子の個性やその子らしさを大切にするための合理的配慮を行っていることを、もっと世の中に広まって欲しいと思います。(三年Dさん)

今後、世界の情報や事情を収集し、ディスカッションを重ねていく予定です。

【文献】

赤木和重(2019)なぜ特別支援学級・学校の在籍児は急増しているのか？…排除としての「途中転籍」に注目して 博報堂研究成果報告書

(図1) プレゼンテーション例「現代人の死生観と生命倫理」(掲載ページ数に合わせて19スライドから10スライドを抜粋)

1 現代人の死生観と生命倫理
～1～
生活心理フィールドワーク1 和泉 幸菜

2 はじめに
人間の「死」とは誰もが直接的または間接的に関わる重要な問題である。死そのものを前もって体験することは出来ないが、死を身近な問題として考え、生と死の意義を探索することは出来る。
死生観とは、個人の発達過程や経験によって大きく左右されるものである。そのため、人によって多種多様かつ非常に広範であるとされる。
人生の有限性に気づき、時間の尊さを意識すればよりよく生きることが出来る。

3 目的
先行研究では、どちらも質問紙を用いて主に医学生を対象に死生観を調べており、価値観、実習経験の有無により死への捉え方に違いがあることが示されている。
しかし、先行研究では対象者が限大であるため、一人に時間をかけて調査をしていない。質問紙であるため、数値化されたデータがほとんどである。
そこで本研究では、ヒアリング調査を主体に行う。
ヒアリング調査によって、数値化できない個人の感情、意見を得ることが出来る。
年齢、専門分野の違いが死生観の違いを生んでいるのかを明確にしたい。

4 方法
ヒアリング調査①
調査時期：2021年11月24日
調査対象者：S先生
手続き：事前にヒアリングを行う日時を連絡、先生の研究室にてヒアリング調査を行った。ヒアリング内容は、社会変化に伴う死生観の変化について、延命治療や終末医療に関するものである。

5 結果
ヒアリング調査①の結果、死生観とは一人ひとりの内面的なものであるため、個別性が強いものであるということが分かった。
また、社会変化に伴う死生観の変化については大きな変化は見られないのではないかとすることも明らかになった。
医療現場では、パターナリズムからインフォームドコンセントの考えへ変化し、終末医療の在り方も患者の意思をより反映できるようになりつつあることが分かった。
反省点も多く見つかった。

6 方法
ヒアリング調査②
調査時期：11月31日～12月16日
調査対象者：14人→S先生、H先生、N先生、
生活心理専攻1年(3人)、
幼児保育専攻1年(2人)、看護学生1年(2人)、医学部生1年(1人)、
経済学部生1年(1人)、社会学部生1年(1人)、介護福祉学部生1年(1人)
手続き：14個の死に関する質問項目を元に関き取り調査。

7 結果
・6、10の項目から、若い学生ほど死に対して恐怖心を抱く傾向が極めて強い。しかし、先生方は比較約、楽観した捉え方であった。
・延命治療について、**延命しないが圧倒的多数**。経済的・身体的負担を考慮する人や、家族に苦がらんでいる事を受けて悲しませたくない、形をしているだけで生きていては意味がない、そこまでして生きたいとは思わない、など、少人数ではあるが、延命治療は「少しでも長く生きたい」など生きていることに価値を見出している。
対象者の中では、実際に無意味な延命治療を受けている知人の家族が完全に理解しているところを見て「延命は絶対にしたくない」と強く思う人もいた。

8 考察
調査から、年齢や専門分野に加えて、更に重い病気の経験の有無、葬式の参列回数、宗教の信仰、親戚を看取ったことがあるかどうかなどのさまざまな要素が個人の死生観を構成していると考えられる。
また、**近親者の死や医療・福祉現場への実習経験**はその死生観に少なからず影響を与える。

9 最後に
質問内容の改善点、聞き取りの感触を得るために今回はヒアリングを重視して行った。
今回の経験から、来年以降は更に規模を広げてヒアリング調査やアンケート調査を行いたい。
また、「死」と深く関係のある「火葬の文化」や、「墓の社会史」「宗教学」などにも注目してみたい。

10 【引用文献】
・望木純代、島田健吾、白石泰三、櫻沼樹(2015)「医学科学生における生命倫理観と死生観」46巻4号 p.355-363
・田中愛子、杉洋子、金山正子、中尾久子、東玲子、池口直樹、奥田麻文、吉原浩、小林春男、芳原達生(1999)「医学科学生における生命倫理観と死生観」49巻4号 p.165-172
【参考文献】
・第8巻 終末期医療の倫理 63p～86p
・新潮新書「死と生」 佐伯啓思
・東京大学教養講座10「生と死II」 木村直三郎
・東京大学出版会「死生観と生命倫理」 関根清三
・都市文化研究 「死と死別の社会学」 藤原隆三
・医学大学教育研究部附属教育実践総合センター研究紀要第一号「死の準備教育」の巻頭「中村一夫」
・日本臨床麻酔学会誌40号「死への準備教育」アルフォンス・ゲーゲン

感染症拡大防止のため、引き続き制約のあるなかでの開講となりましたが、二〇二二年度は、特に学生のポテンシャルの高さと成長の可能性について、強く実感しています。

生活文化学科生活心理専攻では、生活のなかの課題について考える視点や姿勢を身に付けることをねらいとして、一年次後期に「生活心理フィールドワーク1」の授業を行っています。二〇二二年度からは、それまでの複数クラス・複数教員体制から一クラス・二教員体制へと指導体制を移行し、主として四年間の学びの方法論の基礎を体験的に理解することを試みています。二〇二二年度後期の「生活心理フィールドワーク1」では、二〇二〇年度と同様に、感染症拡大防止対策もふまえながら授業を計画し、実施しました(表1)。指導体制の移行はありつつも、それまでのフィールドワークの授業で課題とされていた学生の自主性に関する育ちを促す構成を試行しました。学科内の先生方の様々なご協力を頂き、スケジュール調整も含め学生が自ら試行錯誤する貴重な場が可能になりました。学生は先行研究などの文献研究の内容をふまえた上で、自身の知りたいことを明らかにするために適した方法(アンケート調査・ヒアリング・アライブズ研究など)を自ら選び、データ収集・整理を行いました。そして、最終的には、それまでの積み重ねに基づき報告会でプレゼンテーションを行いました(図1)。

感染症拡大防止のため、引き続き制約のあるなかでの開講となりましたが、二〇二二年度は、特に学生のポテンシャルの高さと成長の可能性について、強く実感しています。

回	内容
1	卒業論文中間発表会について(感染症対策のためオンデマンド課題)
2	ニュース記事等についての調べ学習(感染症対策のためオンデマンド課題)
3	オリエンテーション・枠組みの設定
4	知りたいことについて明らかにするための方法
5	先行研究①
6	先行研究②
7	方法論
8	データ整理・プレゼン作成・練習(祝日週をはさむため2週間)
9	報告会①:各回13名ずつ
10	報告会②
11	報告会③
12	報告会④
13	まとめ
14	卒業論文発表会について(感染症対策のためオンデマンド課題)

(表1)「生活心理フィールドワーク1」(2021年度後期)スケジュール

「発達行動小児科学」研究室の紹介

本学生活文化学科 教授 塩川 宏郷

この数年、「見た目が僧侶の小児科医です。」と自己紹介して笑いを取ることから授業や講演を始めることにしていました。筆者は卒業後三十五年、小児科医としては三十年のキャリアを持っています。

小児科学には臓器別のサブスペシャリティ（小児神経学や小児循環器学など）がありますが、「発達行動小児科学」もその一つです。発達行動小児科学とは、読んで字のごとく子どもの発達や行動を主に対象とする小児科学の学問領域です。実はこの用語はあまり一般的に用いられていませんし、研究室名として使われているのはおそらく実践女子大学だけです。取り扱うテーマは自閉症や注意欠如・多動症などの発達障害、不登校などの行動面の問題、不安や強迫などかつては「神経症」と呼ばれていた疾患、心身症、摂食障害や統合失調症などの精神疾患のほか、子ども虐待、トラウマ、非行、災害、さらには家族や地域社会の在り方なども含まれます。いわば「子どもと子どもに関係するすべて」がその研究対象です。

主として「発達障害」を中心的なテーマにおいて研究を行っています。へき地医療の経験から、医療と保健・福祉・教育は不可分な領域であって、有機的な連携と活動が重要であると感じています。特に発達障害は子どもだけでなく、家族や学校・

た共生社会のイメージを問うアンケート調査では、最も多くみられたキーワードが、「理解」「相互」でした。つまり環境を構成している人が、発達障害あるいはその特性を「理解」することが大きな環境変化であり、発達障害のある人の支援につながるということです。このことから、発達行動小児科学研究室では、発達障害やその特性に関する啓発、さらに具体的な行動面への対応について知識や理解をふかめてもらう活動を学内外で展開しています。

発達行動小児科学研究室では、特に子どもの発達障害や、虐待・非行などの社会的なテーマを研究しています。発達障害(近年は「神経発達症」)はひと昔前よりも理解が進み、インクルージョンや特別支援教育といった主として教育の領域での研究や知見が積み上げられてきました。一方医学・医療領域では、脳機能や遺伝子などの生物学的な研究は進んでいるものの、実際にどのように診断し、どのように治療・療育を行うのかという臨床的な研究は十分ではありません。支援や治療にはその子どもの発達状態を精密に調べ、診断名をつけるプロセスが必要ですが、発達障害の専門医はまだ少なく、問題の指摘から診断まで長期間かかってしまうことも珍しくありません。そこで、当研究室では「臨床推論による発達障害のスナップ診断」を研究テーマの一つとしています。これは、発達障害の診断プロセスを簡略化し支援に早くつなぐことを可能にすることを目的としたものです。スナップ診断とは子どもの発達・行動特性をいくつかのキーワードとして記載し、キーワードの組み合わせによる臨床的な推論

幼稚園や保育園のみならず、地域社会全体で支援を考えていく必要があります。それぞれがそれぞれの役割分担を明確にし、情報を共有することが重要です。発達障害はコミュニケーションや社会性の問題、興味・活動の限定やこだわり、さらには多動・不注意・衝動性などを特徴としています。いずれの徴候も子どもの行動だけでとらえるのではなく、子どもの置かれている環境ぐるみでその相互作用、あるいは関係性という視点ととらえる必要があります。コミュニケーションが苦手という症状は、誰でも一度は自覚したことがあるでしょう(ワタシのコミュニケーション能力は完璧!という方がいらしたらぜひお会いしてみたい)。つまり、発達障害の症状は、どんな人にもみられるものであり、それが障害となってしまうのは、その人が置かれている状況や環境に左右されます。「障害はその人にあるのではなく、その人と環境との関係性の中にある」ということ、発達障害はこの「社会モデル」でとらえることが重要です(近年は「生活モデル」としてとらえる傾向になっています)。そのような背景から、発達行動小児科学研究室は「お互いさまの地域社会づくり」をキーワードとして活動してまいりました。

さて、障害は環境との関係性ですので、環境が変われば障害の状態像も変わります。環境とは気温や湿度、住環境などの物理・化学的な環境だけではなく、心理社会的な環境という側面もあり、その中にはわれわれも含まれます。つまり、発達障害のある子ども(当事者)にとっては、われわれ一人ひとりの環境を構成する一要素です。成人発達障害当事者に行っから診断を導き出すことです。スナップ診断の可能性がどの程度の確からしさで認められるかをベイズ統計の手法を用いて検討しています。二〇一九年にその第一報となる結果報告を福井県で開催された日本小児精神神経学会で発表いたしました。その内容は二〇二〇年の本学紀要に掲載されています。二〇二一年からは科研費も取得することができたため、より大規模な対象による検討や診断のみならず療育や予後について予測するためのデータ収集が進行しています。

発達行動小児科学研究室のゼミナールには現在三年生十二名、四年生九名が在籍しており、それぞれが自分のテーマを持ち卒業研究・論文執筆の準備をしています。学生の研究テーマは、オタクから自殺、恋愛感情、自己肯定感、終末期医療など多彩で、なんでもアリ、が合言葉です。また、ゼミ生以外の有志学生による「尊厳死」勉強会や、教職員を対象とした発達障害についての学習会「大坂上みのり亭」を開催してきました。コロナ禍で予定していた合宿や矯正施設の訪問・見学を中止せざるを得ませんでした。今後も引き続き子どもの発達や行動、心について研究を進めていきたいと思っています。

■ 誰の何のための「義務」なのか

本学生活文化学科教授 田中 正浩

担当教科「教育制度論」（二年次後期履修）での授業場面を一部スケッチし、授業内容と学生の学びの様子を紹介します。

学生にとって耳慣れているはずが、その意味を尋ねると意外なほど答えに窮するのが「義務教育」です。授業の冒頭、まずは学生に問います。「義務教育の義務とは誰の何に対する義務か」と。恐らく、この問いを受けて学生が想起するのは、小・中学生時分に「義務教育だから学校へ行かなくてはいけない」「学校で勉強するのは義務だから」などと見聞きした場面であろうと推測できます。よって、このような回答で通用するのかと戸惑いの表情を見せながら、小・中学生に課せられた「学校へ行く」「授業を受ける」といった義務、つまり子どもが教育を受ける義務であると答えてくれます。どのように思われますか。実は、このような回答は少なくありません。

想定していたとはいえ、続く同様の回答を見直すべく、グループでの議論を促し、改めて考えてもらいます。僅かな時間ながら、各自、既習知識を持ち寄り、論を重ねることで正答に近づいていきます。既習知識を活用し、新たな知識を学生自身が獲得していく様子が窺えます。導き出されたのは、親がその子どもに教育を受けさせる義務であるとの回答です。もちろん、知っている学生も若干ながらいます。面白いもので、そのような学

生がいると議論は一層深まります。義務があるのは親だけなのか。義務教育は無償であり、国がそのことに関与しているのであれば、国もその義務を負っていることにならないだろうかなど。各自が主体となり、答えを求めようとしている議論に耳を傾けるのは愉しくもあります。

指名し、テキストにある日本国憲法第二十六条、教育基本法第五条を読みあげてもらいます。そして、義務教育の義務とは子どもが教育を受けなければならないといった義務ではなく、保護者や国・地方公共団体が子どもに教育を受けさせる・子どもを義務教育諸学校に就学させる義務（就学義務）を意味し、加えて、子どもにあるのは教育を受ける義務ではなく、「教育を受ける権利」であることを確認し、共有します。

ここで「教育を受ける権利」、並べて「学習権」と板書します。そして、権利主体の能動性を強調する観点から、教育は単に「付与される権利」に留まるのではなく、近年では「要求する権利」として積極的に捉え、そのような意味合いを込めて「学習権」とも言うことを説明します。かなりの学生が見聞きしている「学習権」ではありますが、両者の連関を認識する機会になります。「学習権」実現のために、子どもを就学させることが保護者の義務であり、同時に、保護者に課された義務の履行を支える国や地方公共団体の義務でもあることも学びます。リアクションペーパー代わりの出席カードにはコメントが記されていました。「子どもにあるのは義務ではなく、『教育を受ける権利』であり、『学習権』であることを学んだ。これらは私たちが主体として持ち

得る権利であることをもつと意識すべきではないだろうか。」権利主体としての自覚が芽生えた瞬間に出会えたように思えました。

一般に、ある目的―幸福、利益、便利さの追求など―を達成するために整えられ、ある程度社会的に認められる仕組みや決まり、組織を制度と呼びます。先人たちは教育に関わる制度をつくってきました。教育法規もそうです。教育制度には、つくられてきた歴史的経緯、背景があります。それを読み取ってもらうことも本授業のねらいのひとつとしています。歴史（多くは社会科学全般）は苦手ですと言って憚らない学生らに少しでも関心を持ってもらいたいと関連する歴史的・社会的出来事を極力取り上げていきます。

義務教育制度の始まりを問えば、学生の多くは昭和期、大戦後ではないかと答えます。第二次世界大戦敗戦、民主主義教育、日本国憲法・教育基本法制定、これらが今日の義務教育制度確立の契機となったことは確かですが、その始まりが明治期であったことをここで新たに学びます。今日と違い高額な学費（授業料）で自己負担であったこと。その負担ゆえ各地で学校焼き討ち事件が起きたこと。学校現場に運動会、制服、修学旅行を導入した初代文相森有礼によって義務教育制度が整備・拡充されたことなど。その上で「明治期の義務教育制度と戦後の義務教育制度では何が異なるのだろうか」と少々難易度は上がりませんが、配付資料をもとに考えてもらいます。グループでの議論を経て概略次のような答えを示してくれます。明治期の義務

教育制度では、学制に示された「国民皆（就）学」の理念は実現されていますが、「教育を受ける権利」「学習権」を保障するためのものではありません。教育勅語体制にあつて、天皇や国家、いわゆる権力・支配者側の利益のための義務教育であり、権利保障としての義務教育は戦後になってからと言えます。

これら一連の理解を深めるため、授業では教育勅語体制下、戦時中の学校教育に関する動画を視聴します。そのひとつが「戦ふ少国民」（一九四四年 電通制作）です。厳然とした事実を知ること、衝撃を受けながらもおおいに考えさせられたことがあったようです。コメントの一部です。「今の日本の姿とはかけ離れすぎていて本当に日本なのかと疑ってしまうほどだった。：当時の日本では戦争が正義とされているように感じた。：教育がマインドコントロールのように思えた。」「一年生から六年生まで、授業はすべて戦争についてのことしか行われていなくて驚いた。特に、四年生の授業では、レコードで敵機の飛ぶ音を聞かせ、当てさせるといったことに衝撃を受けた。正解した男子の誇らしげな顔に違和感を覚えた。」「刷り込むような教育の仕方だと感じた。」「国は子どもを近い将来の戦力として見做して教育しているように思えた。」

本教科・授業が、僅かでも学生の「教育を見る目」を養い、自身の教育観を吟味・検討する契機のひとつとなればと願い、取り組んでいます。

■木製遊具「KAPLA®」の教育的価値とは？

本学生活文化学科 准教授 井口 眞美

現在、一万を超える保育施設等で活用されている「KAPLA®（以後、カプラと称す）」の教育的価値を明らかにするため、本学のプロジェクト研究費（保育教材研究所・二〇二二〜二〇二四年）、及び、カプラの正規輸入元である（有）アイピースより研究費の支給を受け、三年計画で共同研究を行っています。

●問題の所在／なぜこの研究に取り組んだのか

現在、日本のみならず世界的に、非認知能力を育む保育・教育が求められる傾向があります。非認知能力とは、「自分に関する力」と「人と関わる力」を示すと言われ、非認知能力を育む保育・教育が全年代において求められています。

この非認知能力は、主体的に遊んだり学習したりする状況において発揮されやすい力であるとされています。しかし、遊びや学習活動において出現する非認知能力の具体的な様相は明らかになっていません。そのため、遊びや学習活動で発揮される非認知能力の具体的な様相や指導法を明らかにしたいと考えています。

また、非認知能力は、生涯を通して発達し得るものであり、個人が置かれた環境によって左右されるとされています。それだけに、幅広い年代で活用されている活動を例にとり、横断的に調査をする必要があると考えました。

《定例研究会の内容》

- ・ 幼稚園、保育園、中学校での観察調査
- ・ 保育園、中学校、高等学校の実践報告
- ・ 講演「小中学生の活用事例とその意義」
- （学習塾「いもいも」主催 井本陽久先生）
- ・ 子育て支援センターでの活用実態の報告
- ・ 科学館の観察調査、利用者インタビュー

《学会での成果報告》

- ・ 二〇二二年日本保育学会ポスター発表（井口）
- ・ 二〇二二年日本幼児教育学会口頭発表（井口、山元）

●考察／何が見えてきたのか

これまで、保育所と中学校における観察調査記録データに関して、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法に基づき、質的研究分析ソフトMAXQDAを使用しコーディングを行いました。現在までに、カプラは、次の①〜③の三つの力を引き出すのに有効であることが明らかになっています。則近、遠藤ら（二〇二〇）は「非認知能力は、二つの側面で構成される」と述べていますが、我々が調査した幼児や中学生が見せる非認知能力の様相も、その三つの側面に一致すると考えられます。当然ながら、幼児に比べ中学生においては「他者の表現の受け入れ承認」「対話による協働」「計画性」「抽象的イメージの表現」「複眼的視点」の様相が見られる等、発達の違いはあるものの、次のような共通した非認知能力の発揮が見られました。

①長期的目標の達成：カプラ遊びにおいては、つくりたいもの

そこで、多世代にわたり活用されている木製遊具カプラの活動を一例にとつて実態調査を行うことにしました。ちなみに、カプラとは、同一の形（八mm×二四mm×一二〇mm）をしたフランス製の木製遊具で、保育園や幼稚園、児童館等で広く活用されています。

実は、私自身、かつて幼稚園教諭だった時に、子どもと共にカプラの魅力にはまった一人でしたので、今回、カプラの研究ができることに大きな喜びを感じています。

●研究の目的／何を目的とした研究なのか

本研究では、これまで年代別に研究されてきたカプラの教育的効果を非認知能力の観点から包括することを試んでいます。さらに、多様なフィールドでの実態調査を行い、カプラの活動中に発揮される乳児から成人にわたる非認知能力の具体的な様相や効果的な指導法の解明に取り組んでいます。

●研究方法／どのように研究に取り組むのか

- ①非認知能力に関する先行研究の調査
 - ②乳児から成人にわたる幅広い年齢層を対象としたカプラの活用方法や指導法に関する横断的な実態調査
- という二つの方法で研究を進めています。本年度は、月一回の定例研究会を開催し、カプラの遊びを通して発揮される非認知能力について、幼児と中学生が示す様相の共通点・相違点を明らかにしました。今後も、文献調査、実態調査を継続し、カプラを一例とした非認知能力の発揮を促す活動の在り方や保育者・教職員の関わりを明らかにしていきます。

のイメージをもち、その目標の達成に向け、じっくりと取り組む中で様々な方略を獲得している。

- ②感情を管理する能力：カプラを積み上げるためには、自分の気持ちを管理し集中して取り組むことが求められる。幼児では、「感情の表出」が頻繁に見られ、中学生になると「感情の調整」へと様相が変化を遂げている。

- ③他者との協働：カプラの遊びでは、幼児であっても、仲間とのコミュニケーション、協調が促され、他者との協働による「見立て遊び」が円滑になっている。

また、保育者も中学校教師も、「方略を考えさせたり気付かせたりする」「知識を伝える」「感情を管理する能力を認め、褒める」等、非認知能力を引き出すような言葉かけを多く用いているという共通点が観察されています。

本年度から開始した本研究のゴールはまだ遠いのですが、自身、保育・幼児教育学に関わる者として、中高校生の育ちを見通しながら、保育を見直すことの大切さを感じています。自分が大好きなカプラの教育的効果が明らかになることを願って、今後も研究に取り組んでいきたいと思えます。

【保育教材研究所】

所 長・井口眞美

研究員・清田夏代・渡辺敏・大澤朋子（実践女子大）、富安智子・森田叡治（有）アイピース）、塚野浩平（ミドリ杜こども園）、山元洋（千葉県立東葛飾中学校高等学校）、鈴木祥之（早稲田大学系属早稲田実業高等学校）

■ 地域の子育て支援を学ぶ

本学生生活文化学科 専任講師 大澤 朋子

子育て環境が変わった、といわれるようになってどのくらい経つでしょうか。現在、子どものいる世帯は全世帯のおよそ1/5。公園で遊ぶ子どもの声がうるさいと苦情が寄せられ、バスや電車にベビーカーを乗せることに否定的な意見も出る時代です。子どもをもつ男性の長時間労働が是正されないため、母親が家事育児に孤軍奮闘する「ワンオペ育児」という言葉も広く知られるようになりました。子育てに冷たい社会で経済的負担にも苦しむ子育て家庭からは、「子育て罰」なる言葉も聞かれるようになってきました。

こうした状況を背景に、子育てに不安を感じる保護者を支援する取り組みは多種多様に展開しています。保育現場では保護者が保護者の相談に乗り、未就園児にも園庭を開放しています。市町村や児童館などは子育てひろばを開設し、親子に遊び場とママ友と知り合う機会を提供する他、発達や子育ての相談にも応じています。私の研究対象である社会的養護の現場でも、発達の気になる子や子育てに困難を抱える家庭への支援を行う施設が増えています。

社会福祉学研究室では今年、そのような取り組みのひとつである「至誠こどもセンター（以下こどもセンター）」を、三年生が月に二回訪問しています。実際の子育て家庭のニーズを知

り、社会的養護が行う子育て支援の意義を理解することが目的です。

こどもセンターは立川市にある社会福祉法人至誠学舎立川が運営しており、地域の未就園児と保護者が遊びに来られる場所です。コンクリートと木材を活かしたモダンな建築で、大通りから奥まった場所にあるため、とても静かな環境です。乳児から幼児までが楽しめる遊具や絵本が豊富にあり、専属の職員が親子を見守っています。コロナ禍で人数制限や予約制とした時期もありましたが、現在は平日の午前・午後各二時間予約なしで利用することができます。同法人は社会的養護に長年取り組んできた専門性を活かし、こどもセンターの他にも子育て家庭に相談員を派遣するホームスタート事業や、発達の気になる子と保護者のための「至誠こども発達支援クラブくるみ」を運営するなど、地域の親子を支援する取り組みを多数展開しています。

ゼミ生たちは三〜四名のチームに分かれ、金曜日の午前中に訪問しています。初めての訪問時には、こどもセンターの機能や事業概要、利用者の傾向などについて、職員の小島さんからご講義をいただきました。利用者親子がいらつしゃるときには子どもたちと遊び、こどもセンターのプログラムにも一緒に参加します。保護者に子どもたちのご家庭での様子をお聞きしたり、子育てのご苦労を伺うこともあります。利用者がいらつしゃらないときには、遊具の消毒や本棚の整頓など、環境整備のお手伝いをしています。遊具は対象月齢ごとに置き場所が分かれ

ていますが、これは小さな遊具を乳児が誤飲するのを防ぐためでもあります。学生たちは環境整備をしながら、乳児が幼児向け遊具で遊んでいるときには誤飲防止に注意することなども自然に学んでいます。今年の三年生には生活心理・幼児保育の両専攻の学生が所属しており、乳幼児と接する経験には個人差があります。なかには初めて小さい子どもと接したという学生もいますが、かわいく癒やされる反面、片時も目を離せない育児の大変さの一端に触れる経験となりました。

センター長の島田さんは、保健師として勤務していた経験のある方で、遊びにいらした保護者へ自然に声をかけて回ります。上の子の遊び場を求めて赤ちゃんを連れてきたお母さんには、島田さんがお話を聞いている間、他の職員が赤ちゃんを抱っこし、学生たちが上の子の遊び相手をするなど、臨機応変な対応がされています。何気ない会話のなかから、保護者の困りごとの芽を探し、大きな困りごとになる前に支援の手を差し伸べようとするこどもセンターの姿勢が垣間見える場面でした。

小島さんは学生時代に音楽を専攻されていた経歴を活かし、親子で楽しめる音楽のプログラムを実践されています。学生が訪問した際には、季節の童謡を手遊びや打楽器の合奏とともにみながら楽しみました。その他、ボランテアによるヨガ教室やハーブティーの講座など、保護者向けプログラムが大人気だそうです。このような傾向から学生たちは、子育て中の保護者が子どもを連れて行ってもリラックスできる場所と時間を求めていることに気づいていきます。

訪問活動を続けていると、たびたびお会いして学生とも顔なじみになる親子もいます。はじめは保護者から離れなかった子どもも場所に慣れ、学生たちと楽しく遊べるようになりました。保護者の方々も学生たちに気さくに声をかけてくださるので、活動の励みになります。今年十二月には、親子で楽しむクリスマス制作の活動を学生たちが計画しています。活動の成果をしつかり振り返り、次年度のゼミ生に活動を引き継いでいきたいと思っています。



■身体へのノンジャンクを目的として
地域高齢者への運動指導を通じて

本学生活文化学科 教授 島崎 あかね

私の研究テーマは、主として中高年齢層の健康増進です。特に運動や身体活動の実施が、生活習慣病を始めとするさまざまな心身の不調に対する効果について研究しています。私たちは幼少期から教育機関の中で「体育」「スポーツ」を実施する機会がある程度確保されていますが、社会人になると運動のための時間を確保することが難しくなるとともに、生活のあらゆることが便利になったことで身体活動量は減少している状況です。日本人の一日平均歩数は、男性で六七九三歩、女性は五八三二歩（二〇二〇年厚生労働省発表データ）です。かつては「一日一万歩」を目標としていましたが、その数値には遠く及ばないくらい日本人は歩かなくなっています。また、二〇一九年以降の新型コロナウイルス感染症の影響は、外出自粛などの行動制限をもたらし、あらゆる年齢層において身体活動量が減少し、心の健康にも影響を及ぼしています。

このような背景を踏まえて、現在私は日野市多摩平の森自治会と連携して、週に一回の運動指導を実施しています。参加されている高齢者は平均年齢七九歳ですが、皆さんとてもはつらつとしており、毎回私の方が元気をもらっていると感じるくらいです。参加者は、自治会集会所に集合してから本学まで徒歩で移動し、学内ではリズム体操やレクリエーションスポーツを

ゴルフなどを一サイクル四〜五回として、いろいろな活動を満遍なく実施できるようにしています。どのスポーツもそれほど難しいルールや技術を必要とせず、簡単に取り組むことができます。また参加者に合わせて、随時ルールをアレンジすることで、無理なく実施できるように心がけています。時にはチーム対抗でテーマに合わせた漢字を思い出すといった「脳トレ」を取り入れた活動や体組成・足指筋力の測定なども取り入れています。これらの種目や活動を通じて音楽に合わせて体操をしたり、グループを作って協力し合って得点を競ったりすることで、身体を動かすだけでなく会話が弾み笑顔があふれる時間を共有し、心と身体の健康を意識するきっかけを作っています。参加される高齢者の多くは、長くこの活動に参加されていますが、この活動があることで生活にリズムが生まれ、多くの人とおしゃべりしながら楽しい時間を共有することで、心身の健康を実感されています。コロナ禍で一時的に活動を自粛せざるを得なかった時には、家から出ることさえもできず、誰とも会話もせず過ごしたこともあったそうです。そんな中、この活動に参加することで、自然と笑顔や身体を動かす習慣を取り戻し、生活にメリハリが戻ってきたと、コロナ禍以前よりもいっそう積極的に参加される方が増えています。さらに、集団での活動は週一回しか実施できないため、ご自宅でも積極的に身体活動を取り入れてもらえるような資料も配布しています。最も身近に取り入れやすい「歩行」を促すために、携帯電話などの歩数計機能を活用して、毎

体育館やグラウンドを利用して約一時間実施した後、再び集会所まで徒歩で移動します。移動には片道約十五分かかりますが、皆さん和気あいあいとおしゃべりをしながら集団で移動されます。学内で行う活動は、参加者の年齢や天候に合わせて、無理なく楽しみながら身体を動かすことができる内容を考えていますが、リズム体操は「さんぽ」「手のひらを太陽に」「世界中の子どもたちが」の楽曲に合わせて考案したオリジナルの振り付けを覚えてもらい、活動の最初に実施しています。振り付けには身体の隅々まで伸ばす動きや日常生活にはない動きをできるだけ取り入れ、全身をくまなく動かすように心がけて考案しましたが、一つひとつの動きを正確に実施することよりも、曲に合わせてできる範囲で楽しく身体を動かすことを最大の目的として実施しています。主となる活動は、室内ではポッチャやラダーゲッター、メディシンボールボウリング、グラウンドではバター



ポッチャ



日の歩数をカウントし日本中を旅した気分になろうというものです。五千歩で一マス進める国内の新幹線マップを作成・配布して、ご自分のペースで毎日の運動量を「見える化」しています。歩行のように、毎日移動手段としても実施している活動を「運動」として捉え記録していくと、目標への達成感や充実感にも繋がります。

もともとは地域の高齢者の健康増進を目的に始めた活動ですが、この活動が日常生活での身体活動量を増やすことに繋がります。身体だけでなく心の健康にも効果をもたらしてくれることを期待して継続的に実施していくとともに、ゼミ生を始めとする多くの学生が、活動を手伝いながら高齢者との交流を通していろいろな経験の場となるように取り組んでいきたいと思っています。

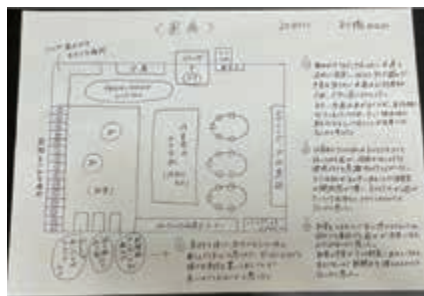


ラダーゲッター

私の授業は学生が理論を学ぶことはもちろん、学んだことをどのように現場で活かすことができるのかを大切に十四回の授業を構成しています。今年度前期に実施した「生活」の授業を以下にご紹介します。

1. 理想の園内環境

この授業は幼児保育専攻の三年生が全員履修しています。まず、授業前半ではそれぞれが育ってきた園や、実習や参観で実際に訪れた園の園内、園外の環境について考えます。まずは園内の環境です。学生一人ひとりが園内にどのような環境や道具があったかを思い出し意見を交換します。その後で、それぞれの環境や道具が「そもそも、なぜあるのか」について話し合います。この活動は学生にはなかなか難しいようです。そもそもなぜ、園内にカーペットが敷いてあるのか。また、なぜ積み木があるのかについてじっくり考えてきたことが少なかったからかもしれません。このような学習を通して、幼児



が安心して過ごせる環境や、幼児、児童の主体性や身体や社会性の発達にはどのような環境が大切であり、そのためにはどのような園内を設計しなくてはいけないかについて考えるようになります。上記の絵は学生が描いた「理想の園内」です。学生は二回園内設計図を書きます。初めに自分が書いた園内の絵について他の学生に伝えます。それぞれ園内環境のよさを共有した後、再度、自分の理想とする園内環境を考え加筆するのです。このように学びを共有し、再度自分にとって大切な幼児保育の環境を考えることが深い学びにつながっていきます。

2. 園内環境から園庭へ目を向ける

次に園内から外に目を向け園庭の環境を考えます。ここでも学生はそもそもなぜそのような環境があるのかを考えたい一方で園庭を設計します。そして他の学生とお互いの園庭の意図を共有し、再度自分の園庭を設計し直します。水場はどこがいいのか、また、砂場は年少のクラスの前がいいのではないかと、幼児の発達段階も考慮しながら園庭の設計を行います。学生自身の保育観も強く表現され個性豊かな園庭が設計されていきました。このように内から外へ少しずつ幼児が過ごす環境についての理解を広げていきます。



3. 園外の環境を考える

これまでの学習を活かして次に郊外での学習を考えます。具体的には動物園への遠足を計画し、実際の遠足を含めてその前後にどのような環境を設定し幼児の学びを深めていくかを考えます。六月中旬、実際に多摩動物園を見学しました。学生は自分が遠足で引率する幼児、児童を設定し見学のコースを実際に回ります。多摩動物園は丘陵地にあるため、コースを考えないと先生も子どもたちも歩き疲れてしまいます。学生は中心となるゾーンを決め、歩くコースや休憩場所、昼食場所を考えていきます。

また、実際に歩く遠足のコースだけでなく、事前の活動、事後の活動についても考えます。事前活動では動物の紙芝居の読み聞かせをしたり、動物の鳴き声や足跡の



写真から動物を当てるクイズを行ったりして、子どもたちの遠足への期待が高まる指導を考えていました。また、事後活動として、自分たちで動物の絵を描き、それを壁面に飾り自分たちだけの動物園を作る活動や、廃材を使って動物を作る活動などを考えていました。このような学習を通して幼児、児童の教育にどのような環境が大事になってくるのか、また、そのために教師はどのような準備を行えばいいのかについて考えていきます。

4. 自分たちで実際に環境設定を行う

授業の後半は自分たちで実際に幼児が遊ぶ環境をグループで制作し、そこでの幼児の遊びを観察し、遊びを通して幼児にどのような力が身についているのかを考える学習を行いました。二年間、コロナの影響もあり実現しなかった保育園の招待が今年度は実施できました。グループごとに動物園の見学に行った後という設定での遊びを考え、準備を行います。地域の保育園の園児を招待し、実際に子どもと共に遊び、自分たちが考えた環境設定は子どもたちどのように受け入れられたのか、また、どのような改善点が考えられるかを振り返ります。

5. まとめ

子どもたちが心地よい、また、遊びを通して様々な力を身につけていく環境を考えることは容易ではありません。よりよい環境を考えるには、学生自身が主体的に学ぶ環境を教師が準備することが何よりも大事なのではないかと考えています。



II

特集2

生活文化学科の思い出

退任教員あいさつ

- 生活文化学科幼児保育・児童(初等)教育専攻「幼小コース」、
誕生から10年の歩み ～ 回想と展望 ～ …… 30
南雲 成二 本学生活文化学科 教授
- 「社会関係資本の再構築」を目指して
地域高齢者へのジェロントロジー教育を通じた貢献… 32
細江 容子 本学生活文化学科 教授
- 日野キャンパスでの19年 …… 34
松田 純子 本学生活文化学科 教授
- 「かかわり」に支えられた5年間 …… 36
越山 沙千子 本学生活文化学科 助教

■生活文化学科幼児保育・児童(初等)教育専攻「幼小コース」、誕生から十年の歩み ～ 回想と展望 ～

本学生活文化学科 教授 南雲 成一

十年前の二〇一三年四月、私は初等教育実践研究の満期定年退職と大学教育実践研究のスタートにあたって、お世話になった方々と教え子達に「挨拶と報告」をさせて頂いた。

【三月末日をもつて横浜市立西寺尾第二小学校・校長を最後に定年退職いたしました。横浜市立子安小学校に奉職して以来、横浜国立大学附属横浜小学校、横浜市立東小学校、南吉田小学校、上星川小学校、西寺尾第二小学校と三十五年間の長きにわたり、温かいご支援とご厚情を賜り、誠にありがとうございました。心から厚く御礼申し上げます。

『あしたへいく学習づくり』『くるくるの力を大切にしたい学校づくり』に精一杯取り組ませて頂きました。協働的寄せ鍋文化力の豊かな国際都市横浜を舞台に、子ども達と教職員と保護者と地域の方々が一体となった教育実践の一つ一つがその全てが、南雲の人生の大切な『宝物』となりました。

四月からは実践女子大学生活科学部生活文化学科に勤務しております。今後は、言語(国語)教育、単元学習開発『人間であることの学習、人間になることの学習』の研究を続けると共に、それらを根幹に据えた教師教育(子どもと共に生きる担任力の育成、関わることへの意志と意欲をもって学び続ける教師の成長支援)の実践研究に微力を尽くす所存です。】

言語(国語)教育、教師教育、初等教育実践研究を専攻領域として担う**南雲からのメッセージ**です。

「人間の暮らし・日常、生活と命」を探究(科学)し、未来性ある子ども達と共に人間的成長と発展を、学習文化づくり(造・創)を通して育みあい紡ぎあい、織り成しあい拓(啓・開)していく主体的な教師を目指してください。】

幼小コースI期生の入学が2011年。南雲の着任は2013年。十年の歩みを概観し今後の展望について述べたいと思います。

- ① 2015年3月第I期生卒業 6名
- ② 2016年3月第II期生卒業 7名
- ③ 2017年3月第III期生卒業 10名
- ④ 2018年3月第IV期生卒業 8名
- ⑤ 2019年3月第V期生卒業 10名
- ⑥ 2020年3月第VI期生卒業 7名
- ⑦ 2021年3月第VII期生卒業 9名
- ⑧ 2022年3月第VIII期生卒業 11名
- ⑨ 2023年3月卒業見込み第IX期生 7名……総勢75名。

その内訳は、公立小学校教諭職61名、幼稚園教諭職4名、医療事務職2名、地方公務員職1名、民間企業職7名です。

公立小学校教諭61名の内訳は次のようです。東京都27名、埼玉県9名、山梨県5名、神奈川県2名、静岡県2名、長野県2名、茨城県2名、千葉県1名、福島県1名、群馬県1名、秋田県1名、栃木県1名、横浜市3名、川崎市2名、さいたま市2名、一都十一県三政令市で元気に活躍中です。

採用試験の現状は、現役で一次・二次試験を突破し正規採用者として着任するケースが85%程度。臨時的任用教員としてスタート、よく努力し翌年正規合格採用者として堂々と成長し

そして、実践女子大学後援会「会報91号(二〇一三年秋)『学科着任先生の紹介』の頁」にて、次のような願い・初心(教育実践研究の指標)を述べさせて頂いた。

【新設された生活文化学科幼児保育専攻「幼小コース」における『学びの基盤』を確認しておきたいと思えます。

生活文化を学ぶ…生活文化学科の学びの対象は、「人・暮らし・社会」です。人間・社会の諸現象の根底にある思考を養い「心豊かなよりよい暮らし」を構想し、これからの社会に生きる実践力へとつなげていくことを目指します。

学びの姿勢…人として生きる営みの足元にある「生活」の中から「人が文化的に生きるとは何か」を問い続けます。本当の豊かさとは何かを見極めつつ、確かな生き方を掴む努力を続けます。それが生活文化学科における学びの姿勢です。

学びの実際…子どもから高齢者まで、人の一生とそれを支える家族・家庭を考えます。(保育・教育・療育・福祉・発達)自分自身を見つめつつ人間とは何かを考えます。人であることと、人になることを探究します。(哲学・心理学・教育学)人間を取り巻く社会を知り、身近な生活から社会の仕組みに目を向けます。(情報・環境・経済・家族・学校・地域)

「人・暮らし・社会に関わる物・事・様」の見方・考え方を学び、様々な知識と知恵を総合化(時に統合化)しながら、現代社会に内在する問題(課題)を掘り下げ、問題解決・課題解決の方法を探り、これからの時代どのような暮らしを選択・創造していくべきなのかを構想し、実践します。

ていくケースが15%程度です。いずれにしても「幼小コース」の学びと実践に真摯に取り組む、大学一年生から一歩一歩着実に歩む努力を怠らないことが成長の源動力です。

最後に南雲から「今後の展望」として、「幼小コース専攻の伝統」にしてほしいことを述べておきます。

◎保いく・教いく・療いくの『三つのいく(育・行・生)』に主体的に関わる専門職人として歩もうと意志する若者達へ、次の事柄を大切に歩んで(学んで)ください。

☆いつでもどこでも、子ども達の「あそぶ・よるこぶ・まなぶ」の**三つの「ぶ」**を大切に、『あしたへいく学習づくり』を通して生きる力を子どもと共に保護者と共に紡ぎだし、織り成す先生になりましょう。あきらめない、しょぼくない、ためらわない、へこたれない、いじけない、くよくよしない。『今日というかけがえのない一日を精一杯生きて、明日へいく(育・行)』です。

☆次の**三つの「けん」「あん」「き」**も是非心がけてください。

『はっけん・たんけん・ほっとけん』～学びと遊びと喜びのエネルギーです。時間・空間・人間の三かんでも大切に！

『あんぜん・あんしん・あんてい』～ドラえもんの主題歌にあるアンアンアンです。アンパンマンのやさしや・つよさ・かしこさもつながります。一人ひとりの子ども達の命、居場所・暮らし、代理不可性に満ちた人生を大切に！

『げんき・こんき・ゆうき』～元気・根気・勇気、この三つの「き」が、「やる気」をそだてます、はぐくみます！

■「社会関係資本の再構築」を目指して

地域高齢者へのジェロントロジー教育を通じた貢献

本学生活文化学科 教授 細江 容子

今回の原稿依頼のテーマは「生活文化学科の思い出」に関わる内容のことである。ここでは、研究を通じての内容を示すことで地域貢献と学生への教育還元に関わる内容をその思い出（体験した印象的事柄）として述べてみたい。

私の科学研究費のテーマは、これまでの研究テーマと関わる「社会関係資本創出を想定したジェロントロジー教育の新たな展開」である。この研究では人生一〇〇年時代の共働、共生の地域づくりを志向したFourth Ageのジェロントロジー教育プログラムの新たな展開を目指すものである。研究の目的は、今後二〇年で倍増（一〇〇万人増）するFourth Age世代における人生一〇〇年時代のライフステージを想定した地域社会において、ICTの学習とその利用・活用による生涯学習を通してのジェロントロジー教育プログラムを新たに展開することを目指すものである。

特にコロナ禍においては高齢者の「外出自粛」等の結果、運動不足になり、基礎疾患の悪化やFrailty（虚弱）の進行など心身への悪影響につながる（健康二次被害）が報告されている（久野譜也、2021）。この報告では、高齢者への「コロナ禍における健康二次被害対策」のために情報発信が重要であり、その情報提供をより効果的なものにするため、情報提供のあり方・

促すことである。これらの要素を活用することによって、高齢者が情報にアクセスしやすい環境を生み出すことが出来ると考える。

今後二〇年で倍増するFourth Age世代における研究のキーとなるのは、身体的機能の弱まるFourth Ageが、ICT利用・活用を通じて、生活と関わるジェロントロジー教育プログラムについて生涯学習を行う中で、特にコロナ禍で大切となるコミュニケーションの機会を増やし、柔軟で多様な社会関係資本を地域に創出することであり、サイバー空間の中でそれが可能になる様な新たな学習様式を展開することであると考えている。さらにまた、ジェロントロジー教育を通じてFourth Ageの新たな人生一〇〇年時代の肯定的高齢者像を創造することを可能にしたいと思っている。

次に研究と関わる教育について述べてみたい。

教育においては、本学のDiploma policyにおいて「多様性を受容し、多角的な視点を以って世界に臨む態度【国際的視野】」を持ち、「多様な価値観を持つ国内外の人々との交流を通して、相互の理解と協力を築こうとする態度、国際感覚を身につけて、世界に踏み出し社会を動かそうとする態度」の重要性が示されている。受講生が国際的視野を広げることが目的として海外の著名な研究者の招聘に基づき、毎年講義を実施している。

コロナ禍以前では、毎年テキサス大学サンアントニオ校東アジア研究院のMimi Yu副院長を招聘するなどして講義を実施していた。Yu教授は私の要請を受け、テキサス大学の学生

工夫が必要であるとの認識に至っている。コロナ禍においては、日常生活の中で家族以外とのコミュニケーション機会が減り、高齢者に情報が届きにくい状況になっていることに加えて、高齢者に生じやすい心理特性などがあることも示されており、従来と異なる情報提供・発信の方法を検討する必要があると考えている。コロナ禍におけるFourth AgeのICT利用・活用（Zoom等）の学習とそれを通じた情報の収集や学習、コミュニケーション機会の増加は、人生一〇〇年時代に健康寿命を延ばし生き続ける高齢者の心身のWell-beingにつながるものであるといえる。コロナ禍・コロナ後での本プログラムにおいては、高齢者に強く表れる心理特性の一部として、「楽観主義傾向」「時間割引傾向（現在バイアス）」「ポジティブティ・バイアス（ポジティブティ効果）」に対するナッジ要素を活用した情報提供を行うことを想定している。

ナッジとは、アメリカのシカゴ大学リチャード・H・セイラー（Richard H. Thaler）氏が提唱した行動理論である。「ナッジ（nudge）」は英語で「軽くひじ先でつつく、背中を押す」ことを意味する。ナッジの構成要素には、「EAST」（下記四つの頭文字を取ってEASTとされている）と呼ばれる四つのフレームワークがあり、それらはEasy（かんたん）、Attractive（魅力的）、Social（社会的）、Timely（時宜にかなった）である。「Easy」は行動の難易度を下げることであり、「Attractive」は魅力的な選択肢を用意することであり、「Social」は社会的な行動だと意識させることであり、「Timely」は適切なタイミングで行動を

とともに毎年本学を訪問し、特別講義を行うと同時にテキサス大学の学生と本学学生との交流を実施していた。しかし、コロナ禍でこの企画も断念せざるを得ない状況となった。

しかし、今回「生活文化史2」の講義で、大韓民国 忠南国立大学 社会科学部教授で国外の共同研究者でもある珠賢教授が、国際交流研究基金を獲得し京都大学で九月から研究をスタートしたことから、コロナ禍であったが講義をお願いすることが可能となった。

テーマは「韓国の文化と家族問題―親と子供の関係―」である。このテーマは、細江の科学研究費取得テーマ「社会関係資本創出を想定したジェロントロジー教育の新たな展開」で扱う高齢者問題とも関わる内容でもあり、コロナ禍の中、本講義の企画により学生へDiploma policyと関わる研究の教育還元に貢献できたと考えている。



Mimi Yu教授の講義と学生との交流風景

■日野キャンパスでの十九年

本学生活文化学科教授 松田 純子

「実践校」とともに

早いもので、実践女子大学に勤務して十九年目になります。私が実践女子大学に着任したのは二〇〇四年の春、生活文化学科が二コース（その後二専攻）になる前年のことです。考えてみると、今年度大学に入学した一年生の皆さんが誕生した頃に着任したということになります。当時の赤ちゃんたちが立派に成長して私の目の前にいると思うと感慨無量です。

着任当時は、実践女子大学の全ての学部が日野キャンパスにありました。その後、二〇一四（平成二十六）年四月より、日野と渋谷の二校地体制となりましたが、引き続き日野キャンパスを拠点とした生活科学部所属の私にとって、実践女子大学といえ日野キャンパスです。四季折々の花や樹木の美しさが楽しめる、ゆつたりとした日野キャンパスは、いつも手入れが行き届いており、学生だけでなく、教員にとっても大変居心地のよい学び舎です。私の研究室の窓からは、美しい富士山の姿を望むこともできます。



き届いており、学生だけでなく、教員にとっても大変居心地のよい学び舎です。私の研究室の窓からは、美しい富士山の姿を望むこともできます。

ンデミックも教育・研究活動に大きな影響を及ぼしました。幼児保育専攻で保育者養成に携わってきた身としては、特にコロナ禍の中での実習に苦戦しました。

二〇二〇年（令和二年）年四月七日に、東京都を含む七都府県への一回目の緊急事態宣言が発出され、授業は全てオンラインとなりました。六月に予定されていた保育実習も全て延期となり、自宅で慣れないオンライン授業の準備に追われながら、実習の見通しも立たず、どうなってしまうのだろうと不安に駆られたことを思い出します。幸いにも、その後実習は何とか実施できるようになり、コロナ禍に翻弄された実習生たちも、資格・免許を取得して無事に卒業していきました。

現時点でも、コロナ収束の目途が立っているわけではありませんが、長期に及ぶコロナ対策の経験を通して、保育現場も大々も「新しい生活様式」を取り入れた日常生活を築いてきました。たとえ困難な状況にあっても、保育も保育者養成も継続されなければなりません。コロナ禍の影響、たとえば保育者のマスク着用が乳幼児の発達にどのような影響を及ぼすのか、検証はこれからなされることでしょう。保育者養成の場を離れても、関心をもち続けたいと思います。

出会う感謝

思い出は尽きませ



その日野キャンパスのシンボルといえ、やはり四館前の大桜でしょう。満開時の絢爛豪華さ。これぞ「実践桜」と私は勝手に呼んでいます。



民俗学者、国文学者であり、釈道空と号した詩人・歌人でもあった折口信夫は、卒業していく教え子に次のような歌を贈っています。

桜の花ちりぢりにしもわかれ行く遠きひとり

君もなりなむ

初めての卒業生を送り出して以来、毎年、卒業の季節になるとこの歌を思い出し、実践の卒業生に重ねてしまいます。入学式の頃に満開となる「実践桜」を写真に撮り、新年度早々「実践桜だより」としてゼミの卒業生たちに送ることを恒例としてきました。「今年も実践桜が咲きました」という一文に、「貴女の母校は変わらず日野にありますよ」というメッセージを込めてきました。また、その返信に彼女たちが近況を知らせてくれるのが楽しみでもありました。その「実践桜だより」も二〇二二年春号で終わりだったかと思うと改めて寂しい気持ちになります。

コロナ禍の中の保育実習

十九年の間には、いろいろなことがありました。先述の二校地化も含む大きな組織改編や、未曾有の東日本大震災を始めとした自然災害。ここ数年では、新型コロナウイルス感染症のパ

ん。大変なことも多々ありましたが、今日まで続けてこられたのは、先輩の先生方、同僚の先生方、様々な機会に出会うことのできた全ての人たちのおかげです。皆さんとの出会いがなければ、何も成し遂げられなかったと思います。そして、実践生の皆さんにも大いに勇気づけられました。若い皆さんの持つ限りない力と可能性には、いつも驚かされてきました。実践女子大学での素晴らしい出会いに心から感謝いたします。これらの出会いは、学祖下田歌子先生が私に用意してくださったのかもしれない。



十分な恩返しもできないまま、早めの「卒業」となり、私自身が「遠きひとり」となってしまうますが、遠方より実践女子大学、そして生活文化学科のご発展をお祈りしています。

最後に

「実践桜」の根元に、毎年タンポポが咲きます。桜の花のように注目を浴びることはありませんが、しっかりと地に根を張り、可憐な黄色い花を咲かせます。やがて綿毛が風に乗る、新たな地で根を張り、花を咲かせるでしょう。このタンポポが次の私の目標です。



■「かわり」に支えられた五年間

本学生活文化学科 助教 越山 沙千子

二〇一八年四月に本学生活文化学科に着任以来、あつという間に五年という月日が流れました。着任時、四歳だった長男は四月から小学三年に、五か月だった次男は年長さんになります。子どもたちも先生方や助手の皆さん、学生の皆さんにかわいがっていただいていた楽しい思い出が沢山あります。

ここでは、「かわり」をテーマに、私なりにこの五年間を振り返ってみたいと思います。

学生とのかわり

担当した科目の中心は、幼児期・児童期の音楽表現でした。授業を通して、学生一人ひとりの良さを知ることができ、学生から学ばせてもらうことが多くありました。学生の反応や取り組みから、もつとこうした方が良かったなどと反省することもありました。その一方で、表現が変わった、試行錯誤の後にできたという瞬間を共有して喜び合えたことや、時間をかけて取り組んだ成果が出た時、やりがいを感じ、充実した嬉しい気持ちになりました。

また、初年次教育の「実践入門セミナー」を担当させていただいたことで、生活心理専攻の学生ともかわることができました。特に、コロナ禍においてオンラインで行った二〇二〇年

先生方、助手さんとのかわり

生活文化学科の先生方からは、紙面には到底収まらないほどの、様々なことを学ばせていただきました。大学教員として、研究者としての心構えはもちろんのこと、先生方のお人柄、さりげない気遣いから、人として「こうでありたい」、「できるようになりたい」と思うことが沢山あります。自分のものにするには時間がかかりそうですが、いつか先生方のようになるよう努力し続けたいと思います。

また、新カリキュラムで開設された「子どもと表現」を担当するにあたっては、井口眞美先生と島崎あかね先生に造形表現及び身体表現の視点から様々なことを教えていただき、授業に取り入れることができました。先生方の視点を知ることで見方や考え方、活動がグンと広がる面白さを実感しました。

研究の面でも、生活文化学科の先生方それぞれの領域からご助言いただいたり、領域を超えて情報交換ができたことは、私にとって大きな学びであり、楽しみでもありました。

助手さんにはいつもきめ細やかなサポートをしていただきました。音楽室やレッスン室の管理、授業で使用する道具などの準備を丁寧に行ってください、本当に助かりました。助手室で元気をもらうことも多々ありました。

おわりに

この五年間、多くの方々とのご縁をいただいたおかげで、彩り豊かな充実した日々を送ることができました。心より感謝申

度は、学生も教員も大変だったと思います。授業後にZoomで話したり、manabaでやりとりをしたりしながら乗り越え、実際に大学で会えた時、嬉しかったと同時にホッとしたのを覚えています。

研究室では、レッスンはもちろんのこと、話をしに来てくれる学生もいて、一緒に笑ったり、考えたり、悩んだりした思い出が数えきれないほどあります。卒業後も連絡をくれたり、会いに来てくれたりする卒業生がいることも、とても嬉しく思っています。退職はしますが、これからも生活文化学科の学生、卒業生を応援していきたいと思っています。

地域の方々とのかわり

日野生まれ、八王子（北八王子駅周辺）育ちの私にとって、地域の大学で働き、地域の方々とかかわることができたのは大きな喜びでした。日野市子ども部子育て課や児童館、「手をつなごう」などもまつり」の実行委員の皆さんをはじめ、地域の方々に大変お世話になりました。地域の皆さんとかかわりの中でいつも感じるのは、子どもたちを大切にしている熱い思い、あたたかさです。また、そうした思いが次の世代へと受け継がれているところも素晴らしいと思います。「なつひの」や児童館のイベントで、日野っ子たちと遊んだり活動したりする中で、子どもたちの自由で豊かな発想から新たな気づきを得ることもできました。今後も日野の皆さんとのつながりを大切に、微力ながらできることを行っていききたいと思っています。

申し上げます。学び、経験したことを生かして、人とかかわり、つながりを大切にしながら今後も努力していきたいと思っています。

最後に、生活文化学科の学生、卒業生のますますのご活躍と、日野市、実践女子大学のますますのご発展を祈念しております。



「初等教科教育法（音楽）」での箏の授業の様子

卒業生や児童館の子どもたちからのメッセージに励まされています

Ⅲ

生活文化学科の取り組み

オープンキャンパス報告

- 体験型オープンキャンパス報告(生活心理) …………… 40
作田 由衣子 本学生活文化学科 准教授
- 幼児保育専攻のオープンキャンパス報告 …………… 42
島崎 あかね 本学生活文化学科 教授

高大連携の取り組み

- 高大連携の取り組み～立川女子高等学校の土曜特別講座
「保育・初等教育の世界にふれてみよう」(幼児保育専攻) … 44
井口 眞美 本学生活文化学科 准教授
- 高大連携の試み「探究の探求」 …………… 46
塩川 宏郷 本学生活文化学科 教授

■体験型オープンキャンパス報告(生活心理)

本学生活文化学科 准教授 作田 由衣子

二〇二二年七月二十四日(日)、生活心理専攻としては初めての体験型オープンキャンパスが行われました。今回は「生活心理の学びを体験しよう」とのテーマに沿って、「発達支援プログラム」と「心理学実験プログラム」という二つのプログラムを用意し、参加者は両方のプログラムを経験しました。本稿ではプログラム内容や当日の様子についてご報告いたします。

発達支援プログラム

心理学の分野の一つとして、「心理支援(臨床心理学)」があります。今回のオープンキャンパスでは、「コミュニケーション」とはの発達支援プログラムを紹介し、来場者の方たちにもその一部を経験していただきました。プログラムでは、自閉症のお子さんがジェスチャーや視線など非言語的な手段によって選択を行った際に、大人がその気持ちに共感し、ことばにしてあげると、子どもはそれを模倣してことばで伝えるようになるというプロセスのロールプレイを経験していただきました。自閉症のお子さん役を長崎ゼミの学生が演ずるなど、長崎ゼミの学生十名にお手伝いをしてもらいました。

の合計十四名と、いつもよりも多めの学生さんたちに「JSTARI」としてサポートしていただきました。心理学実験プログラムでは、プログラム終了後に感想や反省点などを書いてもらいましたので、その中からいくつかコメントを抜粋いたします。

- ・参加していただけた人がとても笑顔で実験に参加してくださっていたことがとても嬉しくやりがいに感じました。
- ・今回は事前の打ち合わせも、練習も当日の打ち合わせも丁寧に行われたので当日の流れのイメージがしやすく動きやすかった。

高校生から聞かれたこととしては、「数学が苦手でも大丈夫か」、「時間割の組み方、どんな勉強をしているか」などの質問があつたようです。今回は学生スタッフをいつもより多めに配置したことで、高校生も気軽に質問しやすかつたのではないかと思います。また、学生さんたちの誘導や説明がとても上手で、大変助かりました。

満足度アンケートより

プログラム終了後に、Googleフォームを使って簡単なアンケートにご回答いただきました。十七名の方から回答があり、八二・四%の方が満足度を五段階中五(とても満足)と回答してくださいました。自由記述の回答からは、「実際に体験していただくことで、より興味関心を深められた」「どちらのプログラムもとても楽しく学ぶことができた。それとともに、不思議に思うことも出てきて、より、学びたいと思う気持ちが強くなっ

心理学実験プログラム

私たちがものを見たり覚えたりすることの仕組みを考えるのも「知覚心理学」や「実験心理学」という心理学の一つの分野になっています。今回のプログラムでは、ものを見るとはどういうことかについての簡単な実験を二つ体験していただきました。前半のストループ効果では、色と文字の認識が食い違うときの感覚を体験し、後半の鏡映描写では、対象を目で見るときの形に沿って手を動かすというシンプルな動作の背後にある視覚と運動の協応とその学習を体験していただきました。このプログラムでは、作田ゼミの学生に実験の説明などを手伝ってもらいました。

学生スタッフの声より

今回は長崎ゼミから十名、作田ゼミから二名、二年生二名

赤

赤 黒 青

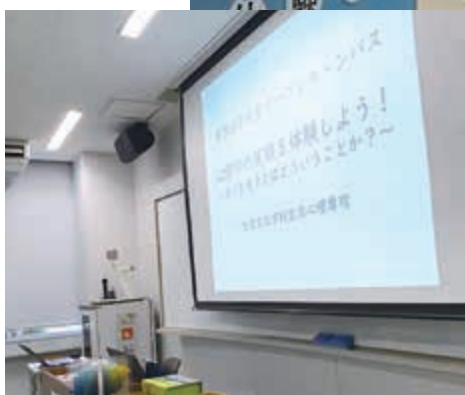
【ストループ効果】
文字の「色」を答えてもらいます。



【鏡映描写】
手元を見ずに鏡に映った手を見ながら見本通りに手を動かします。

た」といったコメントがあり、対面で体験していただくことで本専攻や心理学により関心を持つてくださったことがうかがえました。

今回は初めての試みでしたが、大きな混乱もなく無事終了して良かったです。帰り際に、「楽しかったです！」と声をかけてくださる方もいらっしゃいました。準備はとても大変でしたが、心理学という学問や本学の生活心理専攻に興味を持ってくれる高校生が少しでも増えてくれることを願っています。



■ 幼児保育専攻のオープンキャンパス報告

本学生活文化学科 教授 島崎 あかね

本学では、毎年受験生に向けたオープンキャンパスを開催していますが、昨年度と今年度は全学で実施している日程とは別に、幼児保育専攻の特別オープンキャンパスを開催しました。コンテンツにできるだけ体験型のものを取り入れ、幼児保育専攻に特化した内容で構成しましたので、通常のオープンキャンパスとの違いも含めて、改めてご報告いたします。

全学的に開催しているオープンキャンパスでは、「学科の学び紹介」として、四年間の学びについて、授業内容や実習、取得できる資格や免許、卒業後の進路など、担当教員の専門領域の学びを交えながら解説したり、模擬授業を実施して学科・専攻への理解を深めてもらう内容で構成されています。これに対して、幼児保育専攻が単独で行うオープンキャンパスでは、絵本の読み聞かせパネルシアターなどの保育技術を体験してもらい、入学後の学修をイメージしてもらっています。特に幼児保育専攻では「理論」と「実践」を両輪として授業内容を構成しており、保育・教育に関する知識を理論的な学習で身につけ、一年次から行う見学観察実習やボランティア活動、三年生から始まる本実習でその学びを具体的に実践することになるので、それを体験できるようなオープンキャンパスのコンテンツを考えました。また、学生や卒業生と来場する高校生が交流できる時間を多く

取れるように、保育教材の体験や主となるコンテンツは学生が中心となって指導・運営を行いました。

【二〇二二年度(開催日:二〇二二年七月二十五日)】

- 在学生によるトークライブ
- 総合型選抜・学校推薦型選抜のポイント解説
- 「演じてみよう!やってみよう!」保育教材の体験コーナー
- キャンパスツアー



パネルシアターの体験



学生の作品展示

○ 個別相談・学生とのおしゃべりコーナー

初めて幼児保育専攻単独で開催したオープンキャンパスということで、トークライブや保育教材の体験コーナーでは学生に登壇してもらい、学生目線での授業や学生生活の紹介、保育教材の実演をお願いしました。その姿は高校生にとって身近なロー

ルモデルになったと思います。一方、この年の総合型選抜からⅠ期とⅡ期で試験内容を大きく変更したため、ポイントなどを学科の特徴や授業内容とともに、教員から丁寧に解説を加えました。当日は予想を超える多くの来場者があり、保育教材の体験も非常に好評でした。

【二〇二二年度(開催日:二〇二二年八月二十七日)】

- テーマ:「選べる 見える 未来の姿 Special
〜保育・初等教育の世界にふれてみよう!〜」
- 卒業生によるトークライブ
- 幼小コースの学び(四年生による模擬授業)
- 幼保コースの学び(三・四年生による授業紹介)
- 保護者向けプログラム



幼小コースの学び(国語の模擬授業)



幼保コースの学び(レインコートづくり)

○ キャンパスツアー・個別相談・学生とのおしゃべりコーナー
この日も幼児保育専攻単独での開催でしたので、「学生主導」を意識したコンテンツで構成しました。幼児保育専攻には、保育士資格と幼稚園教諭免許の取得を目指す『幼保コース』と、幼稚園教諭免許と小学校教諭免許の取得を目指す『幼小コース』がありますが、幼小コースの学びでは六月に小学校での教育実習を終えたばかりの幼小コース四年生に模擬授業をお願いしました。来場の高校生を小学生に見立て、国語(「スイミー」)の単元指導案をもとに授業を展開してくれました。幼保コース三・四年生による授業紹介では、「保育学演習」「施設実習」「保育活動の実際」の三科目を紹介するとともに、レインコートづくりをグループで行いました。また、卒業生によるトークライブでは、四年間の学びと学生生活がどのように就職に繋がっているのかを本音で語ってくれました。

全学的なものを含めると、五月から月に一回のペースでオープンキャンパスを開催していますが、多くの高校生が複数回(場合によっては高校一年生の頃から)にわたって来場してくださっています。どのタイミングで来場してくださっても、幼児保育専攻の特徴や方針、学びについて体験的に感じ取っていただけるような内容で構成しています。コロナ禍が続きますが、実際にキャンパスに足を運んでいただければ嬉しいです。ご来場をお待ちしております。

■ 高大連携の取り組み～立川女子高等学校の土曜特別講座「保育・初等教育の世界にふれてみよう」(幼児保育専攻)

本学生活文化学科 准教授 井口 眞美

二〇二二年度、幼児保育専攻では、近隣の立川女子高等学校の「土曜特別講座(Sプロジェクト)」の一環として、前期六回、後期五回の授業を開講しました。幼児保育専攻の教員が高校へ出向いて、大学の講義の雰囲気味わえるようにしたり、高校生に本学の音楽室、図工室等に来てもらい、体験的な学修の楽しさを感じたりできるようにしました。

参加した高校生たちは、一回九十分にあたる専門的な学びを通して、保育・子どもと関わる仕事への志向性を高めたり、進学先のイメージを具体化させたりしたようです。実際、授業(前期六回)に参加した高校生からは、

- ・ どの授業もとても興味深く、より保育の世界を知ることが出来た
 - ・ 大学の先生方の授業がとても専門的で勉強になりました。体を使う授業や実際に物作りをする授業もあり、より興味がわきました。とても良い学習になりました。
 - ・ 自分が小さい時のことを思い出して懐かしくなった
 - ・ 子どもたちの考え方を知れた
 - ・ 面倒見がいいだけでなく、想像力も必要な仕事だと思った
- といった感想を得ました。更に、
- ・ 赤ちゃんの人形を使って着替えの仕方等を学びたいです

【梅雨時の遊び…作って遊ぶ、遊んで学ぶ(幼児教育)】

ここでは、実際に行った授業の中から、私が担当した前期第五回(七月十六日実施)の内容についてご紹介します。

この日は、本学図工室で造形表現活動を行いました。活動する中で、幼児教育で大切にしたいことについて感じ取ってもらえるよう心がけ、授業を行いました。

①「にじみ絵」の技法を使って傘を作る

《子どもの気持ちに寄り添った関わりを理解する》
はじめに、コーヒーフィルターに水性ペンで絵や模様を描き、霧吹きで水を吹きかける「にじみ絵」で遊んでみました。

この日は、あえて、「にじみ絵の技法について説明せず、「何でも好きな絵を描いてごらん」とだけ伝えました。高校生が思い思いの絵を描き終わった頃合いを見て、おもむろに霧吹きを取り出し、「魔法の雨をかけると、きれいな絵になるよ」と、高校生の描いた絵に水を吹きかけて回りました。
「わあ、きれいになった」とにじみ絵を楽しむ高校生がいる一方で、自分の描いた絵がぼんやりと滲んでしまい、少々落胆した表情の高校生もいます。

子どもの主体性を尊重したいの思いから、保育者は「何でも好きにしていよう」という言葉を使いがちです。しかし、時にその言葉が、子どもに見通しがもてない不安感を与えたり、子どもを混乱させたりする結果を引き起こすことがあります。授業では、子どもの気持ちを追体験することを通して、子どもの思いに寄り添った関わりの大切さを伝えました。

・ 体を使う授業をもっとやりたいです
等、保育に関して更に学びたいとの意欲も見られました。次年度以降、高校生にとっての有用性、教員の負担等も考慮しながら、工夫、改善を図りたいと考えています。

二〇二二年度 土曜特別講座 授業内容

《前期》「子ども理解」と「梅雨時の遊び」をテーマに

- ① 子どもの世界をのぞいてみよう(保育学)
- ② 子どもと心をのぞいてみよう(小児保健)
- ③ 遊ぶって楽しい、体って面白い(運動生理学)
- ④ 子どもと豊かな音の世界(音楽教育)
- ⑤ 作って遊ぶ、遊んで学ぶ(幼児教育)
- ⑥ 子どもと作る豊かな折り紙の世界(算数教育)

《後期》

- ① 子どもをとりまく様々な問題(児童福祉学)
子どもたちの世界にはどんな問題があるのかな？
- ② 子どもと豊かな音の世界(音楽教育)
様々な音や音楽の楽しみ方を体験してみよう
- ③ 幼稚園や保育園のしくみやまわりを学ぼう(教育学)
目からウロコ！通っていたのに知らないことがこんなに！
- ④ あそびって楽しい！からだっておもしろい！
講座の中で、簡単なからだあそびも行います(運動生理学)
- ⑤ 作って学ぶ、遊んで学ぶ(幼児教育)
幼児が楽しむ造形遊びを、みなさんも体験してみよう

② ビニール傘に絵を描いて遊ぼう

《総合的な遊びの世界を理解する》

続いて、三〜四人ずつのグループに分かれ、ビニール傘に油性ペンで絵を描いて遊びました。「おもちゃのチャチャチャ」がたんとんがたんとん」等、歌や音で遊べる絵本の読み聞かせをしてみせた後、絵本のイメージを絵で表現する場を設けました。

「絵を描くの、苦手」と躊躇する高校生もいたため、「幼児の表現においては、保育者も活動を楽しむ姿勢が何より。子どもの評価も、上手下手ではなく、どのような思いで表現しているかを理解することが大切」と、繰り返し伝えました。すると、徐々に気持ちがほぐれ、「落書きみたいで楽しいね」と、表現活動を楽しめるようになっていきました。

「絵本に出てこない絵も描いていいですか」との声には、「もちろん。思い浮かんだイメージを描いてごらん」と正解のない遊びの面白さを伝えます。終盤には「この傘をさして、雨の日のお外に出てみたいね」傘をくるくる回すと、きれいだよ」と嬉々として傘を回す遊びに浸る姿も見られました。

「何だか歌いたくなるね」と話す『ドレミの歌』のグループの声にこえ、急遽、全員でハンドベルを演奏し、歌う場を設けて授業を終えました。

幼児の表現は、絵を描く、音を奏でる、言葉で伝えるといった表現が独立してなされるものではありません。高校生たちは、総合的な表現遊びの世界を楽しみながら、保育で何が大切なのかを感じ取ってくれたことと思います。

第8号(10月3日実施)

探究通信 “All Different, All Wonderful”

～みんなちがって、みんないい～

【発行日】
令和4年 10月31日
【発行者】
進路・探究部

講演会【リサーチエスションの立て方】

10月3日の6、7限に実践女子大学より塩川宏郷先生を招いて講演会「リサーチエスションの立て方」を実施しました。興味・関心から出した「問い」をさらに深めてリサーチエスションにしていくための方法を講演会を通して教えていただきました。

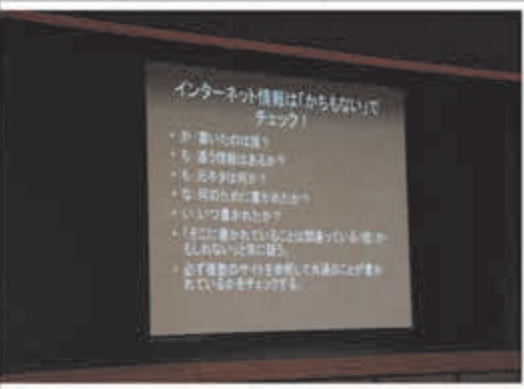
【塩川宏郷先生のご紹介】福島県内のへき地医療に従事後、自治医科大学付属病院小児科、とちぎ子ども医療センター心の診療科、東ティモール大使館、東京少年鑑別所、筑波大学を経て2018年に実践女子大学生生活科学部教授に着任。専門領域は発達行動小児科学、小児精神医学。



～生徒の振り返り～

- ・形式的なものに限らず、「そもそも〇〇って？」素朴な疑問から良い。リサーチエスションは、検証(〇か×かを判断)するための仮説のことで、シンプルなものがいい。いざ興味のあるもの、疑問を探そうとすると上手く出て来ないことが多いので日頃から研究ノートを実践してみたい。Sさんの研究ノートがとても参考になった。リサーチエスションは、仮説が成り立たなかった場合でも新たな研究対象を見つけることができるので、ぜひ今後活用したい。
- ・「研究」というと普段の生活であまり馴染みがないため固い印象を受けていたが、Sさんの体験を聞き、研究のきっかけはなんてことない、ありふれたものでもいいとわかった。そのありふれた疑問をどう深めていくか、そこが重要であると感じた。

- ・私がこれまでの作業の中でたどり着いた問いが心理的なもので、抽象的なものだったので探究のアプローチの仕方が全くわからなくて変えようかと思っていました。ですが、お話しなさったSさんのテーマと論文を書くまでの流れを聞いて、当初考えていた内容のものでも十分探究として突き詰められることが出来るかもと思う事が出来ました。また同時に、難しそうだけど、具体的な流れを知って面白そうだなと前向きに思う事が出来ました。「そもそも〇〇って何？」と簡単な疑問が出発点となると知り、そう考えると、疑問は普段の生活でも思いついているなど気付きました。
- ・日々浮かんだ疑問は今まで聞いてきた中で沢山あるので、そこから最も興味があるものを見つけたいと思った。将来に繋がるか、ではなく興味があって続けられるかを優先したいと思う。



- ・自分の考えつくような問いは探究で扱うようなものではないと思っていただけで今回のお話を聞いて、自分の好きなこと、興味のあることについて調べることが大切であり、これは相応しくないと考える必要はないのかなと思いました。論文などを読むときはしっかり読んで内容を理解することが大切だと思っていただけで多読することが大切だとわかったので、新書シャワーの時のように沢山読むことに重きを置き、自分の求めてたような面白いと思えるような論文を探したいです。

■ 高大連携の試み「探究の探求」

本学生活文化学科教授 塩川 宏郷

学長方針に押される形で、生活文化学科でも高大連携の促進が求められることになりました。今回インフォーマルなルートでの連携事例を経験いたしましたのでご報告いたします。

きっかけは一通のメールからでした。前任校での教え子から紹介されたということで都立竹早高校の関口武史先生から「今年度入学した高校一年生の『探究』の授業に協力していただけないか」とのことでした。学科単位ではなく個人的な依頼でしたので、お引き受けいたしました。

そもそも「探究」とは何かというレベルの理解しかできておりませんでしたので、竹早高校の関口先生とZoomで何度かミーティングを持ちました。

二〇一九年から、文部科学省学習指導要領に「総合的な探究の学習」が盛り込まれました。探究学習とは、生徒自らが課題を設定し、解決に向けて情報を収集・整理・分析したり、周囲の人と意見交換・協働したりしながら進めていく学習活動のことです。探究学習では、生徒の思考力や判断力、表現力などの育成を目的としています。高等学校では「総合的な探究の時間」などの科目において、探究学習を導入した授業が行われています。一年生の授業ということで、一年間で目指すゴールは「探究するテーマ・リサーチエスションを設定する」とい

うことにいたしました。関口先生は、大学で日常的に行われている研究の入り口に達するまでの道筋について、具体的なイメージを持てるような内容にしていきたいとのことでした。小学校・中学校での調べ学習から一歩進んで、自分の興味関心のあることについて、これまでに何が分かっているかが分かっていないのかを明らかにすること、分かっていること何かを分かったのかを決めること、分かっていることについて「仮説」に落とし込むこと、このプロセスを高校生に紹介するという方向になりました。「探究」の授業は毎週・一年間行われます。筆者はそのうちの一回を高校に向向いて「リサーチエスションの立て方」というレクチャーを行いました。卒業研究を始めようとする大学三年生向けの内容をできるだけ噛み砕いて、研究は面白い・楽しい・気持ちいい、が伝わるようなものにしてプレゼンを行いました(次ページにその内容を一部紹介した竹早高校の「探究通信」を掲載)。

「総合的な探究の学習」については、どの高校も試行錯誤しているところのようですが、今後このような内容を学習した学生が大学に入学してくるようになります。大学としては学生たちの知的好奇心に十分応えられるだけの多様な学びのあり方、研究の指導の準備が求められることになるでしょう。引き続き「探究」のあり方を模索し探求する必要があります。高大連携の貴重な機会をいただいた都立竹早高校の生徒さん、関口武史先生に、この場を借りてお礼を申し上げます。

IV

学生の取り組み

学生ゼミ紹介

(生活心理専攻)

- 障害児への発達支援プログラムの開発
—学園祭「なかよしカフェ」での実践— …… 50
長崎 勤 本学生活文化学科 教授
- ゼミナール紹介(社会心理学研究室 水野ゼミ) …… 51
水野ゼミ3年一同

(幼児保育専攻)

- 初等教育研究室(渡辺ゼミナール) …… 52
渡辺 敏 本学生活文化学科 准教授
- 社会福祉学研究室 大澤ゼミ …… 53
阿部 桃子 本学生活文化学科 4年

下田歌子賞受賞者

- 「実践」がもたらす学びへの意欲 …… 54
上阪 水裕 本学生活文化学科 生活心理専攻 4年
- 私が大切にしてきたこと …… 55
山本 愛子 本学生活文化学科 幼児保育専攻 4年

卒業論文

- 卒業論文(四年)題目一覧 …… 56

就活体験記

- 就活体験記 …… 60
山崎 詩織 本学生活文化学科 生活心理専攻 4年
- 保育士採用試験を終えて …… 61
樋熊 実夢 本学生活文化学科 幼児保育専攻 4年

生活心理専攻

■ 障害児への発達支援プログラムの開発
— 学園祭「なかよしカフェ」での実践 —

本学生活文化学科 教授 長崎 勤

二〇二二年十一月十二日・十三日の学園祭で、五歳から大学のゼミ臨床に参加して下さっている自閉スペクトラム症T君（小二）、その弟君（四歳）、それに二歳から七歳までゼミ臨床に参加されていたゼミ卒業生のダウン症S君（小）がカフェの店員をし、参加者に「カルピス®」をサービスする「なかよしカフェ」には、八五〇人にご来店頂き、盛況の内に終わりました。学長、学生部長もご来店頂き、実践女子大学の同窓会（さくら会）の研究賞（賞状、金一封）を頂きました。ご協力頂きました、アサヒ飲料様、障害児のご家族の皆様へ深く感謝いたします。

今年で五回目となる「なかよしカフェ」には、次の目的がありました。●一.自閉症T君、ダウン症S君の臨床活動でのカフェでの支援の経験を広げ、学園祭で参加者に「カルピス®」を振る舞い、喜んでいただく。●二.様々な人との会話の機会とする。また参加者に障害のある子ども達への理解を深めて頂く。●三.長崎ゼミの研究成果の発信の機会とする。

カフェ内に、「自閉症児のための包括的発達の支援プログラム」についての、十連のポスターを掲示しましたが、大勢の方にご覧頂きました。卒業生や、在学生の家族や友人も大勢参加して下さいました。カフェ終了後に、子供たちとご家族を囲み、ミニ同窓会を持ち、近況を紹介し合いました。

年々厳しさを増す、福祉・教育分野ですが、子供たちとご家族を中心にして繋がるネットワークによって、卒業生がそれぞれの困難・問題・課題が、「個」の問題ではなく、「共有」の困難・問題・課題であって、互いに支え合いながら問題解決方法を考え、乗り越えて、一歩ずつでも障害児者が生きやすい社会を創っていただけたらな、と思いました。

今年の特徴として、企業の方が多数ご来店下さいました。IT企業の方が「カルピス®」作りなどの協同活動が、コミュニケーションを促すという結果をご覧になって、「リモート中心になりがち企業内のコミュニケーション改善にもヒントになると思います」と。「コミュニケーション」と情報伝達と違って、そうじゃないですね！具体物のやりとりや身体性を伴った活動がコミュニケーションの基盤なのです！とも。また、大手企業の障害者雇用に関わる方が、「この支援プログラムは何歳まで使えますか？就労前の発達障害の高校生などにも使えるプログラムではないかと思うのですがどうでしょうか？」といったコメントも頂きました。様々な分野でコミュニケーションの困難性が切実な課題になっているようです。



生活心理専攻

■ゼミナール紹介(社会心理学研究室 水野ゼミ)

本学生活文化学科 水野ゼミ三年一同

私たち社会心理学ゼミでは、社会で生活していく中で起こる様々な疑問や現象、人と人が触れ合う中で生じる行動や気持ちなどについて興味があることを研究し、知恵を深めることを目的として活動しています。現在は、「私的発話傾向と自己愛的脆弱性の関連」や、「SNSでの類似性認知の高さと他者への攻撃度・依存度の関連性」、「自尊心感情が恋愛依存度に与える影響」や、「自己承認欲求が社会的比較に及ぼす影響」など様々な分野に関する研究を行っています。

また三年の前期では、「社会心理学とは何なのか」を知るため、社会心理学の概論書を輪講しました。さらに、輪講での理解をふまえて、三年の後期には比較的やさしいテーマを取りあげ、関連する文献を読み、自分たちでその論文を読み解いて、発表や話し合いを行いました。取りあげる研究の内容は基本的に人それぞれ違いますが、皆さまがよく耳にする「吊り橋効果」や、「外見が及ぼす影響」など、心理学を専攻していない人でも興味をそえられるテーマも取りあげています。社会心理学ゼミではこのように、社会の身近な問題から社会心理学を学ばないと関われないような問題まで、幅広いテーマをもとに、みんなで話し合いながら社会心理学への理解を深めています。社会心理学というのは、心理学を専攻しているから学ぶの

ではなく、私たちが人間として生まれてきた以上、学ばなければならぬ学問の一つであるといえるかもしれません。このように、社会心理学ゼミは魅力あふれる研究室ゼミです。皆さまが生きてきて疑問に思ったことや、心理学に興味を持ったきっかけになったことも、実は全て社会心理学の分野の内容かもしれませんね。



幼児保育専攻

■初等教育研究室(渡辺ゼミナール)

本学生生活文化学科 准教授 渡辺 敏

渡辺ゼミナールでは幼児から児童へと続く子どもの発達を学び、実際の現場での見学を通して学びを深めています。このような学びの経験を将来、保育、教育現場で働くときにも役立ててほしいと考えています。

今年の三年生は十名、「教育心理学」の教科書を読みながら、グループワークや話し合いを通して幼児、児童の学びを深めています。また、十名それぞれが関心のある、読み聞かせや自由保育、幼小連携といった内容について実際の見学を通して学びを深めています。九月初旬にお茶の水女子大学附属幼稚園の半日見学を行いました。学生は子どもたちの自由すぎる遊びの姿にかなり驚いたようでした。見学後、先生方と当日の保育について話し合う機会を作っていました。自由な遊びには子どもたちの思いがあり、それを活かせるように保育を行っているという先生方の話は、学生の保育観を広げる良い機会になったようでした。

また、十月には日野市立高幡図書館で読み聞かせ教室に参加しました。本の選び方から、実際に読むときの



本の持ち方やページのめくり方など丁寧な指導をしていただいた後、実際に学生が読み聞かせを行いました。頭で理解すること、実際に理解したことを試す良い機会となりました。

四年生の二名は卒業論文の研究と並行して、小学校教員試験の対策としての小論文の指導や面接の練習も行いました。現在は卒業論文のテーマも決まり、自分たちが教育実習でお世話になった学校の先生に協力していただき執筆に追われています。

渡辺ゼミでは三年生、四年生の交流の機会も大切にしています。春には合同のテニス大会を行いました。夏には箱根へゼミ合宿に行き交流を深めました。一日目の午後はアスレチックを楽しみました。その後、宿舎で四年生の卒論の中間発表の内容を聞きました。夜は花火を楽しみました。時間を共にし、学習のことや進路のことを相談する時間は、三年生、四年生共に有意義な時間になったようでした。



幼児保育専攻

■社会福祉学研究室 大澤ゼミ

本学生生活文化学科 四年 阿部 桃子

初めまして！わたしのゼミの軌跡についてお話しします！

社会福祉学研究室では、児童福祉や発達障害、ジェンダー論やSNS問題など様々な社会福祉や社会問題のテーマの本をみんので一冊選び、章やトピックごとに担当を決めて、一人ひとりがまとめてそれを共有しみんなで考えていくということから始まりました。「そうだったのか」「へえなるほど」と、今までの興味はあったけど詳しくは知らなかった部分までみんなで考えることができました。そうして取り上げた話題により、自分の卒業論文の枠組みができてきました。卒業論文を見据え、自分が気になる話題や興味のある社会問題についての論文や書籍を読んでまとめ、みんなに共有します。読み込んでみると、論文

テーマとして自分なりに研究できるのかなどが見えてきて、テーマ決めも進んでいきます。

真面目に研究もしますが、大澤ゼミは人数も多く、日々楽しく活動しています！メンバーの内訳は、生活心理専攻一人、幼児保育専攻八人で偏りがありますが、幅広いテーマを取り上



げていくのでバランスよく研究することができています。

新型コロナウイルス感染症拡大もあり、ゼミの親睦会の開催も半分諦めていましたが、昨年はみんなが横浜のアンパンマンミュージアムに行きました。アンパンマンとバ

イキンマンのお面を作ったり、アンパンマンショーをみたり、子どもに帰ったような気持ちになりました。

早い時期から卒業論文を見据えていたことで、テーマ設定に時間をかけ、吟味することができて、少しずつですが着実に完成に向かって頑張っています！次にやることを明確にし、毎週のゼミの時に進捗状況を伝えて、足りていない部分を補っていきます。みんなの進捗状況を聞いて自分も頑張らなくちゃ、とモチベーションが上がりますね。困ったことや難しい部分は、みんなに意見を求めることができるのが大人数の強みです！様々な視点からその問題にアプローチすることが出来ます。人数もあればそれぞれ取り上げるトピックも様々で、自分のテーマ以外にも興味深いものばかりで全員の卒業論文の完成が楽しみです。



■「実践」がもたらす学びへの意欲

本学生活文化学科 生活心理専攻 四年 上阪 水裕

私の四年間の大学生活を振り返ると、高い学習意欲を常に維持できていたわけではないと感じる。大学受験、入学の時の、「心理学を深く学びたい」という気持ちが徐々に薄れ、次第に部活やアルバイト中心の日々となり、勉学は後回しとなっていたこともあった。

しかし私が、「学びたい」という気持ちを失わずに四年間過ごせたのは、実践的な環境で学習できたからだと考え。特に、私の学びへの意欲においてターニングポイントだったと感じるのは、ゼミナールと資格取得コースの選択である。卒業論文のテーマや履修できる授業など、どちらも大学生活の後半二年間の過ごし方が決まる重要な選択である。私にとってこれらの選択は、「何故、心理学を学びたいのか」を見つめ直す機会となり、誰かの心理的な支えになりたい、という思いが根本にあることに気付くきっかけとなった。そして実践的な支援について学びたいという、明確な目標を持つことができたのである。

選択したゼミナールと公認心理師コースでは、実際に発達障害児の支援を行う臨床活動と、療育機関・病院に勤務する心理師の業務を経験する心理実習に取り組んだ。そこで私は、自身の圧倒的な知識の足りなさ、知識だけでは対応できな

い支援の難しさを痛感した。座学だけでは、自身の知識・能力がどの程度社会で通用するのか判断しにくい、実践的な学習の場に身を置くことで、自分の未熟さを知り、学び続けなければいけないという意識を持つことができた。考える。さらに学びを広げるために療育機関のインターシップに挑戦するなど、自分から積極的に学ぶ姿勢を取ることができたことも、実践的な経験から学ぶことの必要性を感じ、少しでも多くのことを学び、視野を広げたいと考えたからこそである。

実践女子大学は、名前の通り実践的な学習に適した環境であると私は感じている。私は臨床活動と心理実習にて、心理的な支援を必要としている方々と実際に関わり、座学で学んだ知識の応用と、座学では学ぶことができない技術の両方を学ぶことができた。実際の支援の場に携わり、とても貴重な経験・学習ができたことをとてもありがたく思う。

そして現在私は、障害のある方の雇用支援のカウンセラーとして内定を頂いている。大学入学時点では、将来カウンセラーになるとは夢にも思っていなかったが、自身の根本を見つめ直し、知識と経験を重ねたからこそ、私らしい将来の道を決められたのだと考える。社会人となったら、忙しい日々を圧倒され、また自分の目標を失うかもしれない。しかしそのような時にこそ、再度「何故、この道を選択したのか」と振り返り、学び続ける意欲を失わないようにしたい。

最後に、四年間、努力し続けた自分を誇らしく思う。そして、支えてくださった先生方、友人に感謝している。

■私が大切にしてきたこと

本学生活文化学科 幼児保育専攻 四年 山本 愛子

この度、下田歌子賞を受賞させていただきました。山本愛子と申します。まずは四年間の中で指導してくださった先生方、学校生活を支えてくださった職員の方々に御礼申し上げます。

さて、私は平成三十一年四月にこの実践女子大学生活科学部生活文化学科幼児保育専攻に入学しました。入学したての頃は、初めての履修登録や初めての九十分授業等、不安なことや大変だと思ふことがたくさんありました。それから二年生になり、新型コロナウイルス感染症が拡大し、授業はすべてオンライン授業になりました。Zoomを使った発表や模擬授業を懐かしく感じる反面、課題も多く、毎日のように締め切りに追われていたように思います。三年生の終わりからは二週間の幼稚園の教育実習があり、四年生の五月には四週間の小学校の教育実習があり、無事完了しました。

様々な講義を受けたり、実習をしたりして、知識だけでなく考え方や皆さんのことを学ぶことができました。また四年間大学で学んでいくうえで、どんなときも大切にしていたのは、自分が納得することです。自分の出す課題を、自分の納得できるところまで努力することで、成果が出れば嬉しく、あまり成果が出なかったとしても、次につなげることができました。また課題についてだけでなく、授業で学んだ内容に

についても自分が納得することを大切にしていました。授業で学んだことをまずは素直に受け止めて、自分の中で疑問が生まれれば調べたり、質問したり、友人と一緒に考えたりしました。自分が納得のいくまで追究することによって、講義で学んだことへの理解が自然と深まっていました。

これからも学びを深め、自分をよりよくしていくために、「自分が納得すること」は大切にしていきたいです。もちろん世の中には理不尽だったり、よくわからなかったりして納得がいかないこともあります。実際に大学生活でもそういったことがなかったとはいえません。しかし、納得がいかなかったとしても、そういうものだから仕方ないと考えることをやめるのではなく、こうだったら納得できるのに、という自分なりの意見を持つことを忘れないようにしたいです。

最後に、今回四年間の努力が認められ、下田歌子賞を受賞することができ大変嬉しいです。大学の四年間で得た、かけがえのない経験や学びを糧とし、今後も努力し、さらに成長していきたいと思ひます。

卒業論文(四年)題目一覧

○井口ゼミ

- 幼稚園の預かり保育における課外活動の現状と課題
― 幼稚園教諭へのアンケート調査から考える―
- 保育現場で使用される「子どものうた」とは
― 文献調査や保育者アンケートから見えてきたこと―
- 四〜五歳児のごっこ遊びを通して育つ力
― ごっこ遊びの中で育つ「10の姿」―
- 保育現場における食育の在り方
― 食を専門とする学生と連携した保育教材の開発―
- 保育現場における雨天時の外遊びの実態と課題
― 森のようちえんの活動と比較して―
- 望ましい支援の在り方について
― 見守る支援とやっつけてあげる支援の比較から考える―
- 園庭の固定遊具での遊びがもたらす価値
― 創造性と社会性の観点に着目して―
- アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの繋がりについて
― 「聞く・話す」の観点から―
- 保育所におけるはさみの指導のあり方
― 集団場面における「導入」と「まとめ」の役割や必要性について
― 保育者アンケートやテキストの分析から―

○大澤ゼミ

- 新型コロナウイルス感染症拡大による生活環境の変化と女子大生のストレス度
- 学童保育の在り方の検討(さいたま市K学童の観察調査から)

○塩川ゼミ

- 女性のアルコール依存に関する研究
- 大学生の自己肯定感に関する研究
- 「鉄道オタク」に関する研究
- インターネット情報と自殺に関する研究
- 安楽死・尊厳死から考える終末期医療における意思決定
- 青年期における恋愛観と愛着スタイルの関連性について
- 自己愛性パーソナリティ障害と配偶者間暴力(DV)の関連性について
- 精神疾患を有する親の育児に関する研究
- 子どもの睡眠に関する研究
― 保育園、幼稚園の午睡の観点から―

○高橋ゼミ

- 大学生のチーム貢献意欲を促進する要因についての検討
- 今までの学生生活が日常的リーダーシップ行動に及ぼす影響
― 提案型リーダーシップと応答型リーダーシップとの関係―
- SNSの炎上への関与・容認に自己意識が与える影響
- 心理的負債感とコンピテンシーの関連
― 援助要請スタイル、友人関係方略への影響―
- 親からの直接的・間接的な金融教育が金融行動へ及ぼす影響
- 内的自己認識と外的自己認識の差が提案型リーダーシップに与える影響

- 保育者のアンガーマネジメントの重要性
(感情労働のうち怒り感情に焦点をあてて)

- 乳幼児からの音楽体験
(乳幼児期からの生のコンサート体験について考える)
- 現代女性と「推し」との関係性
- 児童養護施設の職員に求められる専門性
- 現代の地下アイドルとファンの関係
- 精神疾患患者の親がいる家庭への支援
― 地域の保育者としてできること―
- 就労支援と障害者雇用の工夫された取り組みが障害者に与える影響と今後の課題

○作田ゼミ

- 香りが非言語的行動に及ぼす影響
- 性格特性と方向感覚の関連
― 社会的ラベリング説と文化の観点からの検討―
- スピーカーの台数、高さが音の臨場感に与える影響について
- 動画の面白さが時間認知に及ぼす影響
- 香りの塗布条件が感情・状態不安に与える影響
- トリックアートによる注意誘導がターゲットの注目に及ぼす影響
― アルコール消毒液を用いた検討―
- 先天性相貌失認傾向と不織布マスク着用の有無が顔記憶に及ぼす影響
- コロナ禍におけるマスクの着用が対人印象に及ぼす影響
- 譜読みトレーニングによるワーキングメモリへの影響
- 目の大きさ知覚に影響する要因と大きい目の心理的効果の検討

○田中ゼミ

- 幼児期における障害観に関する考察
― 「インクルーシブ教育・保育」を手がかりに―
- 「いい子」という言葉掛けによる可能性
― 愛着形成との関係を手掛かりに―
- 多様化する家族の在り方―変化する家族観を手掛かりに―

○塚原ゼミ

- アイドルを「推す」行為が与える心理的影響
- いじめ場面における傍観者の行動と心理
- 不登校受容と趣味の関連性
- 大学生の友人関係の形成と学習意欲
- スマートフォン依存症が睡眠と対人ストレスに与える影響について
- 養育態度と友人関係が第二反抗期に及ぼす影響
- 女子大生の社交不安障害傾向と防災意識・感染症対策の関連

○長崎ゼミ

- 劇「3匹のヤギのがらがらどん」による自閉症児への協同活動
― 「騙し」の理解の支援―
- 自閉症児のおやつ場面での話し合いによる役割選択
― 自己調整行動と他者理解―
- 自閉症児の協同活動の支援
― 宅配便ゲームによる情報提供・情動共有・問題解決の支援―

○ 松田ゼミ

- なぜ世界中でブルーナの絵本作品が愛されているのか
―ディック・ブルーナの絵本制作思考に着目して―
- 今日の子どもたちにとってのテレビの意義と在り方
- 乳児期の子どもと絵本 ―乳児期における絵本の意義―
- 子育てにおける適切なインターネット利用とは
―「シェアレンディング」と育児不安の関係―
- 日本・中国・台湾の保育における絵本の位置付けについて
幼児期におけるひとり遊びの意味
- 子育て先進国カナダと日本の違い
―なぜカナダは子育てしやすいのか―
- 食物アレルギー児とその親が暮らしやすい環境を作るため
には ―親の視点から問題を探る―
- 誰もが楽しめる表現活動とは ―ダウン症児の視点から―
- コロナ禍における保育現場のマスク着用による影響
―乳幼児期における表情の意義とマスクコロナに向けた保育
現場のあり方―

○ 渡辺ゼミ

- 児童が自ら取り組む学習に関する研究
―自主学習への取り組みを通して―
- 小学校の外国語指導の課題に関する研究

○ 南雲ゼミ

- 教育現場情報化の実態とICT機器を活用した授業モデル(学習単元構成)の設計
- 幼児期・学童期における読書活動について
―子どもたちの読書生活の充実を求めて―
- 学び手一人ひとりが発表のしやすい授業づくりを目指して
特別な配慮を要する児童への対応について
―学級づくりと授業づくりを考える―
- 児童が「わかる」授業づくりについての一考察

○ 細江ゼミ

- 共食頻度が活動意欲に及ぼす影響
- 大学生の自己肯定感の影響要因
―夫婦喧嘩の目撃の有無からの検討―
- 心理的マルトリートメントが共感性に及ぼす影響について
―女子大学生を対象にして―
- きょうだい構成が大学生からみた親子関係に与える影響
- 親子の友だち化が第二反抗期と友人関係に与える影響
- 出生順位が性格に及ぼす影響
- 新型コロナウイルスの社会状況における子どもを持つ家庭
の現状と今後の課題

○ 水野ゼミ

- 就職活動とLGBTQ+ ―リクルートスーツの観点から―
―聴取者・表現者の両側面から―
- 音楽関連行動と精神的健康との関連
- 青年期女性のダイエットの理由から見た個人特性とダイエット
目標との関連
- 友人関係における依存性と自己肯定感との関連
- 日本のアニメの現状 ―アニメを通じて他者と交流または
その内容を共有するための行動についての検討―
- 現実での社交性とインターネット上での社交性
―創作活動とコメントをする頻度の関連―
- 女子大生の恋愛観が恋人との交際に及ぼす影響
―恋愛傾向の観点から―
- コロナ前後での食の意識行動と食に対する充実感および満
足感の比較
- 女児向けアニメと時代の女性像
―『セーラームーン』と『プリキュア』を用いた考察―
- 刀とお酒の歴史の変遷と地理的分布

○ 島崎ゼミ

- 幼児期の経験が現在の音楽活動・身体活動の興味に与える
影響 ―リトミックに着目して―
- コロナ禍における大学生の生活習慣について
- 世代間における遊びの変化 ―環境要因に着目して―
- 女子大学生における睡眠の実態と幼児の睡眠への意識の関
連
- 親と子の運動嗜好及び幼少期の運動嗜好と現在の運動実施
の関係性について

■ 就活体験記

本学生活文化学科 生活心理専攻 四年 山崎 詩織

山崎詩織と申します。私が就職活動を意識し始めたのは大学三年生の秋頃でした。周りの友人がインターンに行き始めたので私も始めました。そして、三年生の三月頃から就職活動を本格的に開始しました。特に夢もなく、自分の行きたい業界も分からない、知識が全くない状態だったので、とにかく、当時の自分には興味のない業界や会社であっても説明会に参加してみることに始めました。説明会の内容をノートに纏め後から見返し、自分に合う業界はどこなのか、どの会社により魅力的なのかを吟味しました。実際に私が就職を決めた「MS&AD事務サービス株式会社」の保険業界は最初から働きたいと考えていた業界ではなく、大学で開催された合同会社説明会の中で知りました。より多くの業界を覗くことで自分では考えてもいなかった魅力的な業界を知ることができます。そして将来の選択肢を広げることができると思います。

私がこの場をお借りして就活生の方に一番伝えたいことは絶対に一人で抱え込まないで欲しいということです。就職活動は提出する物も多く、面接も沢山あり、精神的に疲れることが多いです。そんな中、家族や友人・周りの人は頼れる存在です。話を聞いてもらったり、気分転換に付き合ってもらったり、時にはエントリーシートの添削をしてもらうことも良

いと思います。私自身も母に何度も添削してもらい、意見を

を取り入れました。友人には面接がうまくいかない時にカラオケで励ましてもらったりしました。そして、就職活動の中で何か迷いが生じたら、ぜひキャリアセンターの方に相談してみてください。私自身も何度も相談させて頂き面接の練習や、添削など様々なことを助けて頂きました。就職活動を長年支えるプロならではの視点で、丁寧に教えてもらうことができず。活用しないなんて勿体ないです！どんなに小さなことでも、自分が不安に思っていることを話すだけでも、気持ち が楽になると思います。そしてキャリアセンターの方と話すことで、自分の足りない部分・改善点が見えたり、反対に自分の自信に繋がる長所に気付くことができます。

辛く大変なことも多いかと思いますが、お身体を大切に、時には趣味に逃げたり、友人や家族など周りの方に相談しながら頑張ってください。これを読んで下さっているみなさんと同じく私も不安はありませんでした。面接で失敗してしまいい泣きながら家に帰ったこともありましたが、しかし、このように失敗も含めて、必ず今後の自分のためになると思います。実際、私はあの面接を乗り越えられたのだから、これだつて乗り越えられる、大丈夫！と以前より自信を持てるようになりました。自分を見つめ直す良い機会と、気持ちを楽にして(難しいとは思いますが)頑張ってください！これを読んで下さっている方の魅力が企業側にも伝わり、素敵な縁が芽生えることを願っています。

■ 保育士採用試験を終えて

本学生活文化学科 幼児保育専攻 四年 樋熊 実夢

私は来年の春から、所沢市の公立保育所で働きます。所沢市保育士採用試験を終えて思ったことを書きたいと思います。

私が、公立にこだわって就職活動を行った理由は、昔ながらの保育が展開されているからです。実習園でモンテッソーリ教育など新しい保育も見たいことはありますが、私が理想とする保育は昔ながらの保育だったため、公立園にしました。

そして、福利厚生が良いこと、ベテランの保育士がいることも選んだ理由の一つです。休日や産休・育休を確保できます。また離職率が低いため、ベテランの保育士が多くいます。そのため、多くのことを学べるきっかけになると思います。

それから、自治体によっても異なりますが、障がい児施設や児童相談所などの配属もありうる点は特殊です。このことは、違った視点で子どもに携われるという意味で良い点だと考えています。

勉強については、二年生の春休みに学内の公務員試験講座を受講し、三年生の十二月から本格的に勉強を始めました。実習もあり、中々勉強が進まない時期もありましたが、十二月から始めておけば、余裕を持って試験に臨めると思います。

合格の秘訣は、多くのテキストを用いるのではなく、四冊ぐらいのテキストをひたすら繰り返すことだと思います。そ

して、自分の苦手な教科、得意な教科、解くのが楽しい教科を知ることが大切です。苦しい思いをして出来ないことをやるより、得意と思える科目を勉強したほうが効率が良いと思います。しかし、苦手とはいっても、政治・経済、数的処理は試験での出題数が多いので、解けるようにしなければならぬと考えて取り組みました。

専門科目・教養科目同様に、解いてみて間違えた箇所を印をつけます。そして、二周目は間違えた部分を解いて、二回目も間違えた箇所を印をつける、という勉強法をひたすら繰り返して行っていました。

実習生の頃とは異なり、「保育士」として働くという責任感や不安感を当然ながらどうしても拭えません。そのため、先輩保育士に沢山質問して、真似をしながら自分の保育に自信が持てるように頑張りたいと思います。子どもに不安を感じさせない安心感のある保育士になりたいです。

最後に、皆さんに伝えたいことがあります。きつと、実習や就職で苦しい思いをすることがあります。その時は苦しいだけかもしれませんが、時間が経てば、良い経験だったと感じる時が来ると思います。実習があつたことで、保育に対する考えが変わりました。面接では実習での経験を質問されることもあり、頑張ったことはいつか良い形で自分に返ってきます。苦しいだけではないと今は思うことが出来ます。

就職活動等で選択を迫られることがあるかもしれません。その時は自分が笑顔になれる選択をしてください。

実践女子大学 生活文化フォーラム 第27号

2023年2月14日発行

編集者 生活科学部生活文化学科

発行者 (ホームページ <https://www.jissen.ac.jp/learning/hles/seibun/>)

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1

TEL 042-585-8918

FAX 042-585-8919

実践女子大学ホームページ <http://www.jissen.ac.jp>

〔編集企画〕協力・印刷所

日野テクニカルサービス株式会社

〒191-8660 東京都日野市日野台3-1-1

TEL 042-586-5062

FAX 042-586-8944